

三つのヴォルガ像

— 1856年の文人調査旅行から —

望月哲男

はじめに

1856年、一連の若手ロシア作家による帝国の水辺地域の調査が行われた際に、ヴォルガ流域もその対象となった。本稿は、3人の作家が行ったヴォルガ調査旅行について概略を紹介し、成果の一部を検討しながら、ヴォルガ文化圏とその表象に関する私たちの共同研究の観点からこの調査の意味を考察することを目的とする。

この調査は、当時ロシアの海軍を司り、帝室ロシア地理学協会の長も兼ねていた青年大公コンスタンチン・ニコラエヴィチ（1827-1892）の提唱で行われたものである。これは河川、湖沼、海の周辺地域から水上生活に慣れた新兵を募ろうという帝国海軍強化計画のための予備作業であったが、同時に地域住民の生業、生活実態、民俗学的な特徴などを把握して来るべき国政改革に役立て、また海軍省の機関誌『海事論集 Морской сборник』の誌面を充実させて海軍軍人および国民の意識向上に資するといった、複数の狙いが含まれていた。

この時代のロシアでは、自国の地理風土、民衆の生活、民族文化的状況への関心が高まっていた。1845年に設立された上記の地理学協会も、カフカス、イルクーツク、ヴィリニユス、オレンブルグ、キエフ、オムスクに支部をつくり、地理学、民俗学、宗教学、言語、フォークロア研究などの領域で活動していた。またゴンチャロフの日本紀行に代表される旅行記ジャンル自体も、人気を博していた。一方でこの時代は、クリミア戦争の敗北と新しい皇帝の戴冠の直後、60年代の農奴解放を初めとする大改革の前夜にあたり、鉄道の敷設による交通・物流の加速に促される形で、農民や漁民の生活に大きな変化が生じていた時期でもあった。実際、作家たちの観察記録にも、民俗学的な類型への関心と、時代とともに変化する現実生活の諸相への関心が、二重写しになっている。当時の『海事論集』自体が、クリミア戦争の総括や海軍の改革を論ずるのみでなく、兵士への体刑の廃止、教育制度改革、裁判制度改革など一般政治的問題にも関与する公共性の強い論壇となっていたが、大公の企画はまさにそうした器にふさわしいものだったと言えるだろう。

ちなみに1848年に『海事論集』を創刊した海軍提督リトケ Федор Петрович Литке（1797-1882）は、1812年の祖国戦争時に年少の海軍士官候補生としてダンツィヒ砲撃で腕を示したエリート軍人であると同時に、名高い地理学者でもあった。1826-29年、世界周航調査の際に行ったベーリング海沿岸の諸島や半島の克明な調査が世界的に評価されて、ペテルブルグ科学アカデミー準会員、後名誉会員となり、さらに会長（1864年以降）を務めている。1845年の帝室ロシア地理学協会設立にも中心的な役割をはたし、名誉的な会長役の大公のかげで協会の実務を取り仕切る副会長を務めた。このリトケこそ、1832年から少年期のコンスタンチン・ニコラエヴィチ大公の教育係を務めた人物であった。すなわち地理学協会にも、48年創刊の『海事論集』にも、そして大公自身にも、リトケの軍人・地理学者としての夢と

情熱がたっぷり注ぎ込まれていたと見て間違いない。海軍のリクルート戦略と社会学的な調査と文学趣味とを一緒にしたような56年のプロジェクトは、そうした夢の興味深い展開のように思える。

調査対象は北ロシアの河川・湖沼・海、ヴォルガ流域とカスピ海、ウラル川とオレンブルグ、ドニエプル・ドン流域とアゾフ海で、組織された作家は10名。このうちヴォルガ地域の調査に携わったのは劇作家アレクサンドル・オストロフスキー、作家アレクセイ・ポテーヒン、作家アレクセイ・ピーセムスキーの3名で、オストロフスキーが源流からニジニ・ノヴゴロドまでの上流域、ポテーヒンがサラトフまでの中・下流域、ピーセムスキーが最下流のアストラハンとカスピ海を担当した。

派遣の趣旨や基本条件に差はないが、担当地域の気候風土、交通事情、経済状況、民族構成や信仰文化も異なれば、作家自身の資質や関心も異なるため、彼らの調査とその記録は、各々きわめて個性的なものとなった。オストロフスキーは統計資料を駆使する社会学者の風貌をみせ、首都と違う住民の振る舞いやファッションにも注目する一方で、鉄道が河川交通と周辺住民の生活に与える影響なども冷静に分析している。ポテーヒンは商人になりすまして漁業や林業に携わる人の暮らしを細やかに観察する隠密流で、エッセイ風の記録の中でもしきりにロシア人気質を論じている。ピーセムスキーはロシアの中の混沌としたアジアに驚くオリエンタリズム丸出しの旅行者であり、アルメニア、タタール、カルムイクといった民族について、インフォーマントの話と専門家の研究を利用して熱心に解説している。旅行の目的はあくまでも各地域の住民の実態調査であってロシア国家研究ではなかったが、結果としてそれぞれの作家が、ヴォルガの諸地域を窓口として、ロシア帝国の複数の顔を記録することになった。

本稿では上記の作家たちが残した旅行記、書簡などと、いくつかの関連資料を用いて、この調査旅行の諸側面を概括的にたどりながら、19世紀中期の作家たちによるヴォルガ地域の認識・再発見のプロセスを観察したい。

1. 1856年文人ヴォルガ調査旅行の経緯

1855年8月11日付海軍省へのコンスタンチン・ニコラエヴィチ大公の指令（Д.А. オボレンスキー宛の依頼文）において、新進の優秀な作家群により、1年間のロシア水辺地域調査を行うべく、ペテルブルグ、モスクワで参加者を募る、という企画が明示された。

若く才能に満ちた文人（たとえばピーセムスキーやポテーヒンのごとき）の中で、アルハンゲリリスク、アストラハン、オレンブルグ、ヴォルガおよび我が国の主要湖沼に一時派遣し、海事や漁労に従事する住民の生態を調査したうえで、『海事論集』用の論文執筆を依頼すること（ただし雇用はしない）が可能な者を探されたい。⁽¹⁾

1 *Максимов С.В.* Литературная экспедиция (По архивным документам и личным воспоминаниям) // *Русская мысль*. 1890. No. 2. С. 19. 以下、この調査企画についての詳細は、特に断りのないかぎりマクシーモフの同論文によった。

調査の趣旨は、クリミア戦争で敗北したロシア海軍の機能強化の一環として、フランスに倣い海辺・川辺の住民から水兵を徴兵するという新機軸のための情報収集であった。あえて地理学協会などに属する学者でも軍人・役人のたぐいでもなく、作家たちをこの目的に組織しようとした理由は、明らかではない。ただ、大公はこれ以前から文人との交わりがあり、上記指令書でも名があがったピーセムスキーやポテーヒンといった当時人気上昇中の若手作家を個別に招いて、民衆を主題とした社会性の強い作品の朗読を聞いたことがあった。⁽²⁾ 1840年代の自然主義文学における社会観察への志向と、ジャンルとしての生理学的記録文学（オーチェルク）の方法を身につけた若手作家たちの作品が、大公のリベラルな価値観に訴えたものは大きかったであろう。⁽³⁾ 一方でこの青年大公には、官僚風の虚偽やレトリックへの深い警戒感があった。1855年に海軍大臣に就任した直後、彼は自分への報告に関して「追従ではなく真実を、とりわけ各管理部門の欠陥とそこで犯されてきた失敗に関して、明示的で深い考察に基づいた記述を要求する。行間を読まねばならぬような報告書については、これを突き返してより明示的なものを要求する」⁽⁴⁾ と宣言している。おそらく大公は、若手作家たちの社会観察力と良心的な表現力への信頼と期待に立って、彼らの力を近い将来の社会改革に向けて組織しようとしたのではないか。

この企画は徴兵調達部長 Директор Комиссариатского департамента Д.А. Ополенский 公爵にゆだねられ、ネクラソフ、パナーエフ、ポゴージン、シェヴィリョーフなどの中堅文人たちをアドバイザーとして巻き込みながら、候補者捜しが進められた。その際作家たちに提示された条件は以下のようなものだった。

- * 調査は1856年に開始、1年で調査報告を完了すること。
- * 旅行費用は1名につき1カ月100ルーブリを支給。そのうち半年分600ルーブリを先払いし、さらに駅馬券 *подорожные* を支給する。
- * 海軍省官房長官 Д.А.トルストイ伯爵名で知事等への紹介状を発行し、必要な書類、付添人、荷馬車の供与を指示する。被派遣者に対して「文人 *литератор*」の肩書きを公式に用いる。
- * 調査の際、特に注目する点は、住居、生業、生活状態、船舶関連の状況と具体情報、人類学的兆候（気質、習慣、特徴点）、言語、信仰など。⁽⁵⁾
- * 成果報告書の提出が義務づけられるが、形式・量は各自の裁量にゆだねる。
- * 成果は機関誌『海事論集』に掲載する。ただし海事学術委員会 *Морской ученый комитет* の審査をへる。

2 ポテーヒンは1853年に大公の住む大理石宮殿に招かれ、好評を博しながら検閲機関によって上演禁止になっていた戯曲『人の裁きは神の裁きにあらず』を朗読し、大公の賞賛を浴びた。大公は後にこの作品の上演許可に尽力している。ピーセムスキーは1855年にクロンシュタットに停泊中のフリゲート艦リューリック号で、小説『大工のアルテリ』を大公に朗読している。См. Максимов С.В. Литературная экспедиция. С.19-20; В. Селезнев. «Всякой другой рыбы, кроме красной, он гнушается...» (Алексей Потехин в Саратовской губернии) // Волга. 1998. No. 11-12. [<http://magazines.russ.ru/volga/1998/11-12/selez.html>] 以下、URLは2012年2月29日現在有効)

3 大公の企画と同時代文芸の志向との関連については、中村唯史氏の指摘を参考にさせていただいた。

4 Русская Старина. 1891. No. 5. С. 359.

5 См. Письмо Ф.П. Врангеля к Островскому от 21 марта 1856. А.Н. Островский. Соб. соч. в 10 тт. Т. 10. С. 631.

従来どちらかといえば権力から危険視されていた作家たちの中には、こうした上からのアプローチに戸惑う者もあり、人選はスムーズには行かなかった。しかしやがて以下のような陣容と役割分担が決まった。

ヴォルガ流域：A.H. オストロフスキー（上流域） A.A. ポテーヒン（中・下流域） A.Ф. ピーセムスキー（アストラハン、カスピ海）

ウラル川、オレンブルグ：M.Л.ミハイロフ

ドニエプル、ドニエストル：A.C. アファナーシエフ＝チュジピンスキー

ドン河、アゾフ海：H.H. フィリッポフ, A.M. ミハイロフ, J.I.A. メイ（後病気のため離脱）

ドンとドニエブルの間のステップ：Г.И. ダニレフスキー

北方河川、白海、ラドガ・オネガ湖：C.B. マクシーモフ⁽⁶⁾

これらの作家たちは1856年の様々な時期に対象地域に出発したが、調査そのものは必ずしもスムーズには進まなかった。

現地の反応にしても、知識人青年層は快く迎えてくれたが、保守派や権力者の場合は、隠密の査察官に対するような警戒が先に立った。解放前夜の農民たちも、果たして文人とは役人なのか商人なのか、敵か味方かといった疑心暗鬼の虜になった。従って情報源へのアクセスは必ずしも容易ではなかった。

経済的な面でも、調査費そのものの不足、支払いの遅れなどで、持ち出しになったり、調査が頓挫したりすることもあった。場所によっては移動や調査が可能な季節に限界があったが、調査の延長はなかなか認められなかった。事故や病気などの不測の事態もあって、ピーセムスキーはアストラハンで熱病や鬱病にかかり、オストロフスキーはヴォルガ上流のキャリアズィンで馬車の事故で脚を折っている。

成果報告も必ずしもスムーズに行かなかった。リベラルな大公の意識は雑誌の検閲官には共有されておらず、多くの文章が文壇の慣行に外れるような修正を要求され、いくつかは掲載見合わせになった。ポテーヒンが古儀式派の村を描いた「ケルジェネツ川」、ピーセムスキーのアストラハン・タタール、カルムイク、アルメニア人論、ダニレフスキーによるウクライナの運び屋観察「チュマキー」⁽⁷⁾などがそれに当たる。オストロフ



図1 ヴォルガ流域図

6 オストロフスキー、ポテーヒン等関係者の多くが『モスクヴィチャーニン』に関係しているが、そこには雑階級知識人のロシア志向・民衆志向というべき共通の心性がうかがわれる。（中村唯史氏の指摘による）

7 内陸のステップ地帯とアゾフ海や黒海沿岸との間で、塩、魚他の商品の運送に携わる人々。

スキーのように、雑誌の「編集」ぶりに嫌気がさして、報告記の執筆を中断してしまうケースもあった。首尾よく掲載されても『海事論集』の原稿料は印刷台紙1枚(16ページ)につき25ルーブリという破格の安値で(相場の半額から6分の1)、文人たちには利益にならなかった。それやこれやの理由で、調査の成果の多くがお蔵入りしたり、別の媒体に出されたり、単行書で出版されたりした。

ただし発表された成果については反響も大きく、『海事論集』はこの後類似の個別企画(北方やシベリアなど別の地域の調査もの、海外調査もの、航海記など)を次々に展開していく。ただし1863年には雑誌を専門誌に戻す方針が立てられたおかげで、文人を巻き込んだ総合雑誌的な展開は終わりを告げた。⁸⁾

以下では、ヴォルガ地域を調査した作家たちの活動を追ってみよう。

2. ヴォルガ調査の経緯と成果

2.1 上流域：アレクサンドル・オストロフスキー(1823-1886)

① オストロフスキーの略歴(60年代初期まで)

1823年モスクワ生まれ。父は裁判所役人、法曹家で世襲貴族身分を獲得、母は貧しい聖職者の娘。幼年期をザモスクヴォレーチエ(モスクワ川右岸：クレムリンに対して南側)の商人地区で過ごす。1840年モスクワ大学法学部に入るが3年で中退、1843年裁判所書記官に。商人の生活に取材した数多くのスケッチを描く。1845年ニジニ・ノヴゴロドへ旅行。1848年コストロマへ旅行。1850年計画倒産をテーマにした喜劇『内輪同士は後勘定』でゴーゴリ、ゴンチャローフに評価される。ただし商人階層の反発で作品は上演禁止となり、作者は1851年に裁判所を解雇、警察の監視対象となる(次期皇帝の代に処分を解かれ、作品は61年に再び上演される)。51-53年批評家・詩人アポロン・グリゴリエフらとともに雑誌『モスクヴィチャーニン』の「青年編集部」で活動。53年からモスクワのマーリュ、ペテルブルグのアレクサンドリン劇場でほぼ毎シーズン新作を発表。この時期の代表作に『貧は罪ならず』(54)など。1856年雑誌『現代人』に接近。同年コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公発案のヴォルガ調査旅行に参加。59年ヴォルガ沿岸の町を舞台とした『雷雨』で新境地を開く。批評家ドブロリューボフが『闇の王国の一条の光』(60)で激賞。60年代にかけて、動乱時代以降の歴史戯曲も手掛ける。63年ウヴァーロフ賞を得てペテルブルグ科学アカデミー准会員に。

② 参加の経緯

オストロフスキーは当初は候補に上がらず、56年になって自ら調査への参加を希望した。はじめドン河調査を志望したが、トゥルゲーネフ、ピーセムスキー、ポターヒンの口利きで、ポターヒンの担当地域だったヴォルガ流域をニジニ・ノヴゴロドで分割、上流域を任されることになった。調査には豊かな商人の息子Г.Н. プルラコフを秘書として同伴した。

オストロフスキーがこの調査に興味を覚えた動機は明確ではない。ただ、文芸史家のラクシンは学術的・経済的・社会的動機よりも創作上の動機をそこに見ようとしている。ラクシンによれば、ヴォルガ住民の民族誌学的な記述自体も、月100ルーブリという低額の旅費も、

8 См. Максимов С.В. Литературная экспедиция. С. 44-46.

ニュアンスとして含まれている公的な評価や名誉も、さしてオストロフスキーの関心を引くものではなかった。むしろこの話の直前にペテルブルグに行き、はじめてトルストイ、トゥルゲーネフ、ネクラソフらの知遇を得たモスクワの若手作家オストロフスキーが、創作改新への刺激を受けたことが底流になっていた。トルストイの『セヴァストーポリ物語』に見られるような、現場の生きた情報を通じてロシアの苦難と希望を深く広く伝えることのできる新しい文学にオストロフスキーは使命感を覚え、書齋を出て行こうとしていた — それがラクシンの解釈である。⁽⁹⁾

③ 日程・活動

オストロフスキーのヴォルガ調査は1856年4月18日、モスクワ発トヴェーリ行きをもって開始された。以降トヴェーリを基地として馬車でヴォルガ上流域の町や村を回り、5月23日にはヴォルガ水源のヴォルゴヴェルホヴィエにまで至っている。7月3日カリヤーズィンを訪れた後、馬車の転覆事故で脚を2箇所骨折、2ヶ月間カリヤーズィンで療養した。⁽¹⁰⁾ 旅先の治療で経済的困難に陥った上、接骨の不具合で、8月にモスクワへ帰った後も秋と冬を療養で過ごすことになる。1857年春、歩けるようになると同時に松葉杖でふたたびヴォルガ調査旅行を開始、ヤロスラヴリ、セリゲル湖を訪れた。夏にはリュビンスク、ウグリチ、ニジニ・ノヴゴロドに行っている。

オストロフスキーは調査旅行のプロセスを克明に記録する態度において秀でている。着眼点も大公の意図に忠実で、それぞれの町や村の生活ぶりや産業の様態、特に河川運輸・漁業・交通・商業に関する状況に具体的関心を向けている。モスクワ＝ペテルブルグ間の交通の要所にあたるトヴェーリをはじめとするヴォルガ上流域は、1851年の鉄道敷設以降、人や物の動きが変化したが、そうしたことが生活・産業・住民気質に与える影響にも注意を払っている。調査においては住民への聞き取りの他、手に入る限りの統計資料を活用している。経済的な事項や生業の他に、土地土地の風俗、とりわけ女性たちの服装や振る舞いにも目を向けている。さらにこの調査旅行の重要な副産物として、民衆の言葉の収集がある。劇作家としてザモスクワレーチエの商人たちの特殊な言葉遣いに関心を持ってきたオストロフスキーが、新たにヴォルガ上流域の民衆の語彙を集めたもので、後に『ヴォルガ辞典の試み』（生前未完）としてまとめられた。⁽¹¹⁾

9 *Лакшин. В.* Александр Николаевич Островский. Москва: Искусство, 1982. С. 318-19.

10 けがまでの行程：18 апр. Москва – Тверская стания – в почтовой карете – Тверь. Гостиница на Миллионной; 3-4 мая. Тверь – на почтовых – Городня – Кошелево – Тверь; 10 мая. Тверь – Медное – Торжок; 16 мая. Торжок – Рудниково – Кузнечниково – Качаново – Жилин – Крапивна – Осташково; 22-23 мая. К верховьям Волги. Осташково – (О. Селигер: 23 верст) – Звягин – Куковкино (о. Стержа) – Погост – Волговерховье – Осташково; 29-30 мая. Осташково – Ельцы – Ситково – Бочарово – Бахмутово – Ржев; 2 июня. Ржев – Завидово – Ржев; 9-11 июня. Ржев – Зубцов – Вазуз – Старица – Тверь; 12-18 июня. Тверь – Москва – Тверь; 30 июня. Тверь – Корчева – Кимра (Кимры) – Калязин (3 июля).

11 オストロフスキーのヴォルガ調査旅行に関連する報告書・記録の類いは以下の通り。
報告書：*Островский. Н.А.* Путевые заметки: Путешествие по Волге от истоков до Нижнего-Новгорода // Морской сборник. 1859 г. Фев. С. 178-208 // Н.А. Островский. ПСС в 12 тт. Т. 10. М.: Искусство, 1978. С.322-347.
日記：*Островский. Н.А.* Дневник путешествия по Волге 1856г. // Там же, стр.360-374.

とはいえこの調査自体は決してスムーズなものではなかったようだ。それは次のような、きわめて警戒的な知事との会見の記録からも伺える。

知事は私をかなり尊大な態度で、しかも同時に愛想よく迎えた。白髪頭に黒い目の老人で、身振りも話しぶりも突発的であり、ひっきりなしに桜材のキセルでたばこを吸っている。私が自己紹介して今回の任務について話し出すと、彼はきっぱりとこう言った。／「何の発見もないでしょうし、そもそもここには見るべきものなど何一つありません。漁業はここにはありません。なぜなら魚がいないからです。一度だっていたためしはありません。魚はゴロドニャから、キムルィから仕入れているのです。造船業も惨めな状態です」／私はオスタシコヴォに出かける意図を告げた。／「ヴォルガの水源を探すですって？見つかりはしないでしょう！」／ルジェフとズブツォフの名をあげると。／「そう、ズブツォフには資本家が3人くらいいて、かなり結構な造船工場がありましたが、いまでは戦争のせいで全部だめになってしまいました。県中どこでも工業は戦争でだめになってしまったんですよ」／彼は私を図書室に案内して、自分で編纂した『1846年トヴェーリ県歴史統計概要』という書物をみせてくれた。これは、本人の言によると、もしも皇族のどなたかにトヴェーリ県の名所旧跡のたぐいを訊ねられたときにお見せするべく作ったとのこと。当時は鉄道がなかったために、貴顕のたぐいが非常に頻繁に旅行の途次にトヴェーリに立ち寄り、滞在されたとのことである。／「小生、かのオリガ・ニコラエヴナ様⁽¹²⁾ に一巻を献呈し、感謝の言葉を頂戴する栄に浴しました」知事は私に情報が必要なら知事官房付属の統計委員会、および汽船運航に携わっているグラゼナツプに問い合わせるよう忠告した。別れ際には親しみを込めて私の手を握り、どんなことでも遠慮なく自分に聞きなさい、誰か他の者に訊ねたりすると、きっと嘘を教えられるから、と言うのだった。⁽¹³⁾

④ オストロフスキーの見たヴォルガ

以下上記報告書『水源からニジニ・ノヴゴロドまでのヴォルガの旅』の各章に沿って、オストロフスキーが見た1856年のヴォルガを概観してみよう。なお、彼は上述の事故をはさんで、翌57年にもニジニ・ノヴゴロドまでの旅を行い、全体できわめて多くの調査メモ、言葉や歌の収集、印象記を綴っているが、それについては少なくともまとまった報告書の類いは残していない。ラクシンによればそれは、『海事論集』の発行主体である提督レイネッケを長とした海事学術委員会が、いわば海軍式に最初の報告書の添削に猛腕を振るい、文学的な表現を台無しにしてしまったからである。作業意欲をそがれたオストロフスキーは、集めた資料の多くをしまい込んでしまった。⁽¹⁴⁾

発表されたオストロフスキーの報告書は4つのエッセイ（うち3つは日付付き）からなっ

辞書：Островский. Н.А. Опыт волжского словаря. Печатан в виде «Материалы для словаря русского народного языка» // Там же. С.464-522.

他に多数の聞き書き、観察記録、資料、言葉や歌の収集、書簡がある。

12 大公女オリガ・ニコラエヴナ (1822-1892)：ニコライ1世の娘、ピュルテンブルグ王カール1世の妻。

13 オストロフスキー1856年4月19日付日記。Н.А. Островский. Полное собрание сочинений в 12 томах. Том 10. Москва: Искусство, 1978. С. 361-362.

14 Лакиш. В. Александр Николаевич Островский. С. 325-326.

ている。すなわちトヴェーリの町のたたずまいと経済的状況を主に記述した第1章「トヴェーリ（1856年4月）」、同じくトヴェーリを中心にヴォルガの水運を解説した第2章「春の船団」、トヴェーリから30キロほど下ったヴォルガ右岸の村ゴロドニャの、漁の状況を描いた第3章「ゴロドニャ村（5月3日）」、ヴォルガ源流への旅の途中までを綴った第4章「ヴォルガ源流への道：トヴェーリからオスタシコヴォまで（1856年5月）」である。

A 「トヴェーリ」

第1章「トヴェーリ」は復活祭週の増水の頃、水上交通開始の直前で、満々と濁水をたたえたヴォルガとトヴェルツァ川の交わるあたりを、祭りの晴れ着を着た人々が散歩している光景から始まる。春の船団が到着するまでの数日と、それが去った後の1週間に見聞した町の様子をお伝えしようという趣向である。



図2 トヴェーリ朝景

この文章の主題となっているのは、トヴェーリという町の意外な経済的沈滞ぶりである。トヴェーリは街道と鉄道によってペテルブルグおよびモスクワと結ばれている上に、ヴォルガを行き交う船団が、町のすぐ下に停泊する。もう一つのトヴェルツァ川もヴィシネヴォロツカヤ水系を介してペテルブルグまで通じ、重量貨物の輸送手段を提供している。しかしそのような好適な立地条件にもかかわらず、町が繁栄している様子はない。そうした現象に関する経済的な議論は専門家にゆだねるが、現地での見聞に基づく素人の推論にも何らかの意味があると思い、以下に記す — それがオストロフスキーの立場である。

論点の一つは市民の貧困、低賃金である。トヴェーリの貧しい小市民層の主な職業はヴォルガの渡しであり、約100人が従事しているが、これは日銭が15～20銀コペイカにしかならず、しかも春しかまともな仕事がない。彼らが使うグリーンコフカという渡し船は大変にちゃちで危険な代物である。夏の水の少ない時期には渡し業は20人くらいに減って、残りは安価な河川交通に転業、たとえばリュビンスクまで客を乗せて下り、そこで船を売り払って徒歩で帰るか、残って働く。別の職業は貨物船の荷下ろしだが、これはトヴェーリでは短期労働に過ぎず、また馬を所有していなければならない。約250人がこの仕事に就いている。造船業もトヴェーリでは沈滞傾向で、就業者は45人。冬場は鍛冶屋に変身して釘や船具を作っている。女の仕事は質の悪い毛の靴下編みで、材料と製品の値が同じというくらい安価である。総じてトヴェーリの労働階級は肉などに縁がなく、夢に見るごちそうが亜麻油で炒めたタマネギだというくらい貧しい。少し裕福な者は自前のポートでヴォルガやトヴェルツァ川を舞台に小麦製品、塩、鉄などの輸送販売業をやっている…オストロフスキーの描くトヴェーリ経済は、いかにも低調である。

論の後半で、作者はトヴェーリの好適な立地条件がかえって発展を妨げてきたという逆説的な観察を披露する。鉄道が人の流れを変える以前、トヴェーリは街道町、宿場町、波止場

町として栄え、清潔さを売り物にし、名物も作ってきた。しかし交通・運輸は町の経済基盤にならなかった。船舶はここを中継地とするばかりで、4000を数える平底船にしても、ここで積む荷はないし、降ろす荷はわずかである。つまり住民に労働機会を提供しない。一方、馬車で行き来する旅行者相手の商売は効率がよいが、人心を荒廃させ、経済活動の足腰を弱らせる。

次のような考察は、ことわざ風の表現も含めて、オストロフスキーの戯曲に登場する古儀式派の商人のせりふを彷彿させる。

小娘が半時間ばかりで摘んできたイチゴを小皿にのせただけで、大の男が一日重労働するのと同じ金になるとすれば、誰が汗水垂らして働くだろうか。ただし、何にせよ簡単に手に入るものは簡単に消費されるから、普通人の行き交う場所やいわゆる繁華街には、お楽しみは多いが満足は少なく、呑んで浮かれるばかりで経済は育たない。簡単に稼げると人は楽をすることを覚えるので、技術が発達して勤労が正当な対価を得るような産業の発達が妨げられてしまうのだ。もしも（鉄道のせいで＝引用者）ペテルブルグ街道の交通が廃れずにいたなら、トヴェーリは今でも賑やかな上に、めざましい産業都市になっていたか — いや、そんなはずはない！…まさにトヴェーリに洋々とした未来を約束してくれた好条件こそが、現在の住民の貧困をもたらしたのだと言っても、あながち間違いではなからう。⁽¹⁵⁾

ティマカ川の対岸や河口にできつつある綿紡績工場や造船工場に、オストロフスキーはかろうじてトヴェーリの将来の希望を見ようとしている。

B 「春の船団」

第2章「春の船団」は前章の補足として、ヴォルガの船舶交通の紹介に当てられ、全体がモノの名前と数値で埋められている。ヴォルガに浮かぶ船の種類（蒸気船、平底船、艀でこぐ黒ボート、生け簀舟、渡し船）、貨物輸送のルート（ヴォルガ系とトヴェルツァ系）、各船舶のサイズ、春の船団の積荷（大麻、ラード、穀物、亜麻仁、大麻油、小麦粉、サラミ、ハム、布、獣脂ろうそく……）、船舶従業員（水先案内人、排水夫、舟を引っ張る馬方）とそれぞれの待遇や勤務日程など。この場面のオストロフスキーは、統計学者の声で語っている。

C 「ゴロドニャ村」

第3章「ゴロドニャ村」はヴォルガの漁業を取材しようと出かけた村の記録。古くはヴェルチャーズィンという町として栄えた場所で、3つの教会と5つの修道院を持ち、皇室領の漁民が漁をし、賦役として魚を納めていた。後に馬車馬の乗換駅となったが、今や鉄道の開通でその機能は失われつつある。

概してここでも描写されるのは、鉄道開通以後の生活の衰退である。かつて街道交通が盛んだった頃、村人の生業は3つに別れていた。旅館業、御者業、漁業である。前2者が栄えるほどに漁業も栄え、村の経済は活況を呈していた。

15 *Осторовский. Н.А.* Путевые заметки: Путешествие по Волге от истоков до Нижнего-Новгорода // Морской сборник. 1859 г. Фев. С. 182-183.

「そう、そんな時もあつたけど、もう昔の話さ。昔はいい暮らしをしたもんだ。今は俺たちのうまみもすっかりなくなっちゃった。鉄道にこっぴどくやられたからな！」御者はため息をついて言った。／「じゃあ、農業でもやったらどうかね」私は答えた。／「鎌と鋤じゃあ、金持ちになるどころかセムシになるばかりよ」／「だって、昔だってたぶん金持ちってわけじゃなくて、たださんざん浮かれていただけじゃないか？」／「まったく、旦那の言うとおりだ！本当によく遊び暮らしたよ」／彼らが農業に就きにくいのは、別に仕事そのものが辛いからではなく、自分たちも認めるように、町風の遊興生活にすっかり甘やかされてしまったからだ。塩さえ切らしているのに、日に二度はお茶を飲まずにはいられない — そんな贅沢が身につけてしまった者さえいる。それでなければの金まで持ち出すことになるのだ。⁽¹⁶⁾

現在ゴロドニャ村には10人ほどの漁師しかいず、捕った魚を、1フント4銀コペイカといった、採算が合わないような低料金で、訪ねてくる商人に売っている。オストロフスキーはこの地域の漁法も記録している。二艘の丸木船で行う「ポエズドム」と呼ばれる小規模底引き網漁。ヤナギの枝か麻糸で作った仕掛け籠を水に沈めて行う「ヴェルシ」ないし「ヴァーテリ」と呼ばれる漁法。冬場の梁漁。子供か素人が行う釣り。すくい網漁。捕れる魚の種類は、かわかます、かわめんたい、すずき、うぐい、こい、こくちますといったもので、より高価なちょうざめ類はこの上流ではまれなようだ。

住民の間では予言者イリヤ信仰が盛んで、聖イリヤ祭（旧暦7月20日）を大事にして齋戒する習慣がある — そんな観察もオストロフスキーは記述している。

D 「ヴォルガ源流への道」

第4章「ヴォルガ源流への道：トヴェーリからオスタシコヴォまで」は陸路で行くヴォルガ遡行の旅の様子で、とりわけ中間地点の町トルジョークの有様が描かれる。これはかつてノヴゴロド公国の穀倉として栄えた町で、後にモスクワ公国に吸収され、リューリク朝断絶後の動乱（スムータ）時代に衰退した。オストロフスキーは町の商人・好事家 E.M. エリザエロフ収集の古文書『皇帝ミハイル・フョードロヴィチの命による1625年トルジョークの記述』から、修道院名、地名などと過去の繁栄の事跡を写している。現在の地場産業は、造船、麦芽加工、なめし革加工、刺繍、レンガ製造など。年に2回の市が立ち、売り上げが5万金ルーブリにも上る。ただし産業の活況に比べて賃金が低すぎるため、住民の生活レベルは高くない。漁はここでも不振で、おまけにコウモリカズラを使った不法毒流し漁が横行している。

このエッセイのおもしろさは、他の地域には見られないトルジョークらしい生活習慣や服装を描写しているところである。それによるとこの町では未婚女性たちがかなりの自由を満喫し、夕べの町の遊歩道や公園のベンチには、若きカップルたちが二人だけの世界を楽しんでいるのが見られる。娘にはほぼ全員、決まったパートナーがいて、たいがいその相手と結婚する。町には略奪結婚 *умыканье* の風習まで残っている。青年が娘を（たいがいは娘の親の暗黙の了解の下で）連れだし、翌日二人そろって両親の元にお詫びとお願いに現れて、無事に結婚するというものである。

若い娘の服装の変化にも目がとめられている。かつての短い毛皮外套 *шубка*、サラファ

16 Там же. С. 194.

ン、モスリンの袖、チョッキといった組み合わせが、今ではウエストの細い明色の長い絹地のコート пальто と絹のプラトークといったものになっているという。

これに比べて印象的なのは、既婚女性の暮らしぶり、結婚後の女性は一転して家にこもって外出の自由は大きく制限され、外に出る際にも、大きなプラトークで身を隠す恰好をするという。ちなみに結婚を境にした女性の生活の変質ぶりこそ、ヴォルガ沿岸の町を舞台としたオストロフスキーの名作戯曲『雷雨』の背景をなすもので、そこには調査旅行の成果が直に反映されていると言えよう。

この先エッセイはオスタシコヴォをめがけて石だらけの荒地と辺鄙な村を行く、困難な馬車旅行を描写する。ルドニコヴォ村の特殊なまぐわ、クズネチコヴォ村の石工や出稼ぎ人たち、カチャーノヴォ村の文盲の村民たちといった話題に触れた後、山地に入ってジリノ、クラピヴナ、オスタシコヴォを経て、森と湖沼の地セリゲル湖近辺に至るところでエッセイは終わっている。⁽¹⁷⁾

⑤ 発見と創作への影響

以上のようにオストロフスキーの記録は複眼的であり、トヴェーリ、オスタシコヴォ、トルジョークといった場の歴史的経緯、河川や街道に関わる立地条件と、それに条件付けられた生業・気質・風俗の特殊性、最近の鉄道敷設にまつわる変化を、それぞれ描き分けている。ラクシンの言うようにオストロフスキーが作家としてロシアの「現場」の新しい情報を求めていたとしたら、彼は確かにヴォルガ上流という比較的近い場所に、未知のロシアを発見したのだと言えるだろう。トルストイのセヴァストーポリほどの衝撃性には欠けるものの、そこは古い論理と新しい力が常に対抗し合ってきた闘争の現場だった。動乱時代のポーランド＝リトワとモスクワ国家の間にも、ヴォルガにおける漁労と運輸の間にも、陸上交通における街道と鉄道の間にも、その闘争が行われ、結果として人々の暮らしを変えてきた。かつてテーマとしたザモスクヴォレーチエに劣らない、独自の歴史と生活風俗と主人公たちを持った、新しい表現の対象空間を、彼は見いだしたのである。調査記録の発表においては、やる気をくじくような障害が多かったのは事実だが、ヴォルガ紀行の印象は総体として、創作にとっての題材として、また着想の宝庫として残ったのである。

彼はこの時期に『ヴォルガ夜話 Ночи на Волге』という題名の連作戯曲を構想していた。これは文字通りには実現しなかったが、この後のいくつかの創作は、実質的にこの着想から生まれたと言っていい。前出の戯曲『雷雨』(1859-60)はヴォルガ右岸の高台にある架空の町カリノフが舞台であり、河を見下ろす公園が主な場となる。葛藤の背景となる家父長的な、古風な家の人間関係はそれまでの彼の戯曲と同じだが、自由な感情の発露を奪われた若妻の屈託は、トルジョークでの観察に似た未婚女性たちの自由な振る舞いと対比によって、い

17 オストロフスキーのエッセイ風報告書には、ヴォルガの最上流の様子は書かれませんが、彼の5月25日付の日記には、細く曖昧な湧き水のような源流地点にヨルダンという名の礼拝堂が建てられた、ヴォルゴヴェルホヴィエの様子が記述されている。См. Н.А. Островский. ПСС в 12 тт. Т. 10. С.369-370. なお、ヴォルガ最上流の旅からトヴェーリに戻ったところで、オストロフスキーは自分の才能に対する疑問や根拠のない盗作への嫌疑を盛り込んだゴシップが両首都の新聞に載っていることを発見して、ショックを受けている。このことも、『海事論集』での強引な「編集」も、後の怪我也含め、彼にとってこの旅行は、何かとマイナス要因の多いものだった。См. Лакишин. В. Александр Николаевич Островский. С. 323-324.

っそう深い影を作品に落としている。そして何よりも、崖の上から望まれるヴォルガが、自由な外部世界からヒロインを隔てつつ自由へのあこがれをかき立て、情熱の奔流と不吉な死の両者を同時に暗示するような、両義的な境界として機能している。

ヴォルガというロケーションとその独特な景観や風俗が、ことわざを展開したような彼の戯曲世界に、シェイクスピア劇のような奥行きやコントラストを加えたと言ってもよいだろう。ヴォルガ紀行の片鱗は、類似ジャンルの『実入りのよい場所』（1865）『熱き心』（1868）『持参金のない娘』（1878）にもうかがえる。

一方、歴史劇にもヴォルガ紀行の成果は反映された。喜劇『軍司令官（ヴォルガの夢）』（1865）は17世紀中期ヴォルガの大きな町の出来事であるし、『僭称者ドミートリーとワシーリー・シューイスキー』（1866）はまさにウグリチ、トルジョークなどを舞台としたヴォルガにおける動乱時代の歴史である。ヴォルガ紀行の記憶は、この後のオストロフスキーによって長く反芻されるロシアの新たなる源イメージとなったのである。



図3 源流ヴォルゴヴェルホヴィエ

2.2 中・下流域：アレクセイ・ポテーヒン（1829-1908）

① ポテーヒンの略歴（1850年代まで）

1829年コストロマ県キネシマの、貧しい地主貴族の家に生まれる。1849年ヤロスラヴリのデミドフ貴族学校を優等で終了、2年の軍務をへてコストロマ県知事つきの特任官吏となる。1851年新聞『モスクワ通報 Московские ведомости』に劇評でデビュー。続けて同紙や『現代人』誌にヴォルガ地域に関するルポルタージュ『ヴォルガ沿いの道 Путь по Волге』『田舎町キネシマ Уездный городок Кинешма』『小さな町の慰みごと Забавы и удовольствия в городке』（1851-52）を発表。同じ頃オストロフスキーらのいた『モスクヴィチャーニン』誌の「青年編集部」に接近、オストロフスキーの影響を受けて農民・貴族・新興ブルジョア層を対比的に描く劇作品『人の裁きは神の裁きにあらず Суд людей – не божий』『兄妹 Брат и сестра』『他人の富は得にならない Чужое добро впрок нейдет』（1854-55）を執筆。1856年のヴォルガ調査旅行をへてより農民・漁民生活に通じ、60年代にかけて社会批判的傾向の強いドラマを量産した。

② ヴォルガ調査参加の経緯

1854年、皇帝官房第3部の演劇検閲で上演禁止になっていた戯曲『人の裁きは神の裁きにあらず』を大公の宮殿で朗読、賞賛されて上演許可に。ピーセムスキーとともに調査企画のはじめから大公の指名推薦を受ける。当初、最河口部をのぞく全流域を一人で担当する予定だったが、「2000キロを単独で期限内に調査するのは不可能」という理由付けでオストロフスキーに上流域を譲り、中・下流域5県を担当。56年初頭から1年に亘って調査の後、調査

未了として翌年の継続を（旅費の追加が無理ならせめて駅馬券の数ヶ月延長をという条件で）申請するが却下される。成果の第1報「サラトフ県の紅魚漁」は57年に『海事論集』に発表され、大公に気に入られて謝辞を得るが、以降の2編「ケルジェネツ川」「ヴェトルーガより（旅の記録から）」は同誌には掲載されず、後年別の媒体に発表された。⁽¹⁸⁾

③ 調査姿勢の特徴

オストロフスキーも地元民との酒宴に混じって言葉や歌を収集するなどの努力をしたが、ポテーヒンの構えはさらに慎重で、調査旅行の臭みを消すために商人に化けるなどの工夫をした。以下のような記述は、その様子を伝えている。

何かしら新しく面白いことを見つけるには特別な努力と時間の浪費が必要です。しばしばただ相手に口を開かせるだけのためにさえ。ロシア人はじつに慎重で警戒心が強いので、信用を得るためにはこちらとことん我慢強くなって、特別な態度で望まなくてはなりません。正面から行っても、何も引き出せないでしょう。はたしてその秘密主義や疑い深さが本性によるものか、それとも何か他の原因があるのか、ひとつ次の滑稽な例から判断してみてください。小鈴の付いた旅行馬車を農民の供出馬に引かせて、私はある国有地の村落に着きましたが、後で聞いたところではその地域には新任の管区長官 *окружный начальник* が赴任する予定になっていたのです。私は最初に出会った百姓をつかまえて、暮らしはどうか、商売は、仕事は、収入はとたずね始めました。すると突然、目の前の百姓がさっと膝を着いてひれ伏したのです。／「お役人様、長官閣下、どうかご慈悲を。まったくの無一物で、飢えて死にそうでございます。やくざな土地で小麦も生えませんが、ヴォルガも近年は魚も採れず、漁場の借り手も付きません。何の商売にもならず、すっかり死に絶えるところでございます」／無理やり相手を立ち上がらせると、私は必死に言い聞かせ、納得させた — 自分は何も彼らのためにしてやれない。長官でもなければ役人でさえもない、ただの商人であり、この辺の漁場に何か魚がいるなら借りたいと思って、事情を尋ねに來ただけだと。／「いったいお前は私を何者だと思ったんだね」／「またてっきり管区の長官様だと」／「お前の目は節穴かい、私には髭もあるし服もロシア服だろう？」／「なんですって」百姓はにわかになんて答えた。「いや、たまげましたよ。だって立派な馬車に乗って、おまけに鈴まで付けて来るもんだから。それでもう、どんな風体の人間かなんて、見ちゃいませんでした…。いやいや、たまげた。なんということだ…」⁽¹⁹⁾

ポテーヒンの調査記録は一般的データの収集・紹介よりは自らの観察結果の叙述に特化した印象があり、文章そのものも、説明的記述の中に物語風のシーンが混入するような、ジャンルの自在さを感じさせる。情報としては、漁業、林業など、地域住民の生業にかなりのウエイトが置かれているほか、土地人の個性・人間性をも描写しようとしている。叙述の端々

18 ポテーヒンの調査報告と関連のエッセイ：*Потехин. А.А. Лов красной рыбы в Саратовской губернии // Морской сборник. 1857, No.1; Потехин. А.А. Река Керженец // Современник. 1859. No.1 // Русские очерки. Том 1. Москва: ГИХЛ, 1956. С. 443-468; Потехин. А.А. С Ветруги, из путевых заметок // Век. 1861. No.2, 4.*

19 Потехин. Письмо к графу Д.А. Толстому // Максимов. С. 29-30.

に、ロシア的性格、ロシア人らしさに関する考察が入るところも、オストロフスキーやピーセムスキーには見られない特徴。ヴォルガ中流域には17世紀の典礼改革でロシア正教会から離れた古儀式派が住む場所も多いため、その方面での見聞記としても、おもしろい資料となっている。

④ ポテーヒンの見たヴォルガ

以下ポテーヒンの3編の調査記録に記されたヴォルガ中流域の風俗を概観する。彼の記録した地域の広がりには意外に小さく、最初の記録対象がサラトフ、残りの2編はニジニ・ノヴゴロドの2地域に過ぎない。ただしこれらはそれぞれが広大な地域の一部で、生業も漁業林業を始め、広い領域に及んでいる。住民は多くがロシア人、その一部が古儀式派だが、最後の記録にはタタールの林業者やチェレミス（マリ）人たちも顔を出す。

A 「サラトフ県の紅魚漁」

紅魚とはチョウザメ科のペルーガ белуга、オショートル осетр、セヴリューガ севрюга、ステルリャジ стерлядь などの高級魚を指す。エッセイは春先のヴォルガ増水とチョウザメ類の遡上の話から始まり、聖三位一体祭（復活最後50日目）の漁師の祝日風景（飾り付け、舟競争、歌など）のスケッチへと続く。

以降は漁師の生業の描写。季節になるとヴォルガ左岸の砂地に漁師の泊場 стан が作られる。泊場はごく簡素な造りでブヨもいるが、「質素なロシア人は四の五の言わずに半年間、暑さも寒さもこらえて過ごす」。⁽²⁰⁾ 漁場の人間構成は、漁場を借用した漁主と雇われ漁師からなり、漁師には定給雇用型と請負型がある。漁主と漁師の間の共生的貸借関係について、ポテーヒンは詳しく解説している。なお漁場自体の所有主は個人、国・皇室、都市自治体に分かれる。

ヴォルガの漁は生け捕りが基本なので、漁網による漁が主流になるが、禁漁となっている仕掛け漁もあり、両者の比率は3：1とされている。禁止対象の置き針仕掛けについて、著者は果たしてそれが魚に致命的なものだろうかという、規制の見直しへの提言を試みている。

典型的な二枚網漁法の場合、漁の構成材料はボートと漁師 ловец および助手 бесельник となる。ここからポテーヒンの叙述は、漁師デメンチエフと助手ヴァニューシャによるある日の漁の顛末というお話調になる。最初は晴れた日の漁、次が荒れた日の漁である。どんなに危険な目に遭おうと、天候は人間業ではない故に「神が濡らし、神が乾かす」とロシア人は納得する。もちろん同時にロシア人特有の暢気さや不用心を批判する余地もあるが、どんなに用心しても間に合



図4 サラトフの広いヴォルガ

20 Потехин. А.А. Лов красной рыбы в Саратовской губернии // Морской сборник. 1857, No.1. С. 46.

わぬ状況もあるのだ⁽²¹⁾ — 概して著者はロシア人気質に共感的である。続いて危険なヴォルガの突風 *полоса* に関する2つの挿話。初めは舟の転覆で息子を亡くした漁師に関するしめやかな物語。続いて、突風で転覆した舟の8名を救った漁師と、その恩に報いなかった者たちのエピソードが語られる。自らの命を省みず人々を救った60才の老漁師は、自分の動機を以下のように説明する。

自分はもう老人で、長くこの世に生きてきたから、子供ももう大きくなっている。この世のことは何もかも神様の思召し、だから目の前で人が死ぬのを見ていられたのさ。⁽²²⁾

一方この功業に対して遭難客の一部は、十分な謝意を表すことをしなかった。救われた直後に水で濡れた大量の札を乾かすような地元の金満家も、後にろくな礼すらしなかったのである。ポテーヒンは無私な漁師とエゴイストの客たちをまとめて、次のように説明している。

この状況はまことにおもしろい。一方ではロシア人の勇敢さと自己犠牲精神を示し、他方では・・・他方では、残念ながら全く別の特徴を示しているからだ。しかし諺にも言うではないか、一軒の家には必ず出来損ないもいると！⁽²³⁾

彼によればこのような功業はヴォルガ全域を通じて毎年行われているのだが、その善意の人々の名は記録に残らないのである。

この先はヴォルガの川底を掃除する潜水夫 *водолаз* の厳しい労働が美談風に語られ（「だがロシア人はすべてに耐え抜くのである」）、漁師の生簀 *садок* の種類、機能、使用法、魚輸送の知恵が語られ、イクラの加工法が紹介される。

最後にはサラトフ県の漁状況が概観されるが、それによると漁の成果では下流のツァリーツィン郡が優越している。ヴォルガの水脈の変化による魚の遡上の難しさ、大規模水産業 *рыбопромышленность* の導入と河口の堰、やななどの影響で魚の生態が変化した結果、上流になるほど魚が減少していることが語られる。いずれにせよ、漁師の口に高級魚は入らないが、「ロシア人はここでもまたわがままは言わず、食べられれば神様のおかげ、もし食べられなくとも嘆きはしないのである」。⁽²⁴⁾

最後に漁師の料理の模様と、アルテリ単位で食器を共用して行う食事ぶりの不潔さにもポテーヒンは触れている。

B 「ケルジェネツ川」

ニジニ・ノヴゴロド県セミョーノフ郡ケルジェネツ川沿いの森林地帯が舞台。かつては「うっそうとした森の茂み、熊と鹿と分離派と贗金作りに優しい場所」⁽²⁵⁾ だったところで、エッセイは森林業に従事する古儀式派が居住するリュコフ郷ホフルィ村の探訪記録である。

21 Там же. С. 58.

22 Там же. С. 61-62.

23 Там же. С. 60.

24 Там же. С. 71.

25 *Потехин. А.А. Река Керженец // Русские очерки. Том 1. Москва: ГИХЛ, 1956. С. 446-447.*

住人は冬期に働く森林労働者。冬になると村を離れて宿営し、春まで労働。厳冬を歓迎するのは樹木伐採後の運搬に好適だからである。作者はここを12月に訪問した。

本村の生活はロシアの森林地帯に典型的なもので、住居は夏の家と冬の家および厩舎からなり、樹木の蜂巢穴 борги による養蜂を営んでいる。訪れた筆者たちは留守番農婦のもてなしを受け、ついでにビール брага、蜂蜜酒 мед の味とその製法が紹介される。やがて留守の老人が、嫁にかけられた呪い порча をはらした話を披露する。嫁に原因不明の痛みやけいれんの症状が出たので、目星を付けた女を脅迫して呪いを解かせたらよくなったという話である。

その夜中、訪問者たちは20キロの雪道を宿営地へ向かう。途中で道に迷ったのを契機に、十字路に十字の目印を付けるロシアの習慣、盗伐人と森番のエピソード、道を知らぬ案内人の話などが披露される。さんざん迷ったあげくに、御者はある地点でひらめきのごとく行くべき道を悟るのだが、そこでポテーヒンは「全くロシア人はどこに置かれても決して変わらず、どんなところでも自分の性格を曲げないのだ」⁽²⁶⁾ と感心する。

宿営地に着くと、そこは4メートル四方、天井の低い建物で、主人の老人とその息子、雇われ人足たちが暮らしている。訪問者が酒を振る舞おうとしても、元民兵だった男の他数人をのぞき、大半は（おそらく古儀式派の習慣から）手を付けない。そもそもこの地方ではウオトカはあまり吞まず、祭りの時もビールか蜂蜜酒を好むという。

炉端話の中で森林業の経済的仕組みが明らかになる。働き手は賃金先受けで一冬の間拘束されて労働に従事し、木材価格は労賃に反映しない。したがって儲けに預かるのはリスコヴォ村にいる資本家たちで、地域住民の大半は彼らに搾取されているのだという。

端的に言えば、この業界では相互信用が欺瞞に立脚し、相互欺瞞が信用に立脚している。お前が俺にお前を騙す可能性を与え、そのことによってお前が第三者を騙す可能性を得る見返りとして、俺はお前に金を託す。お前が俺に金を託し、それによって第三者を騙す可能性を与える見返りとして、俺はお前に俺を騙すことを許す。…つまり、資本家が貧乏人をループリ単位で搾取すれば、貧乏人は極貧者をコペイカ単位で搾取することになる。⁽²⁷⁾

ポテーヒンの解説は、いかにも資本主義嫌いのロシア知識人風である。周辺の製紙工場も同質の搾取を行っているという。ちなみに伐採労働者の賃金は、馬と込みで一冬100紙幣ルーブリ。冬営の間は一切家には帰らず、一日中労働し、ジャガイモ主体の貧しい食事で過ごす。夏は村に戻ってささやかな農業を営むのだという。

一夜の睡眠の後、ジャガイモの朝食を済ませて冬営地を後にする。亡き宿営長の祖父が分離派の隠遁者 отшельник で長老 старец と呼ばれていたことが語られる。道中、木材を運ぶ筏の話も紹介される。やがて作者の頭に森の野人 лесной дикарь の逆説というべき感想がひらめく。森に住む人間たちには、自然の只中の貧しい生活ゆえに、迷信の生ずる蓋然性が高いにもかかわらず、実際には日々の生活に追われるあまり、不要な想像力の働く余地がない（＝従ってリアリストの側面が強い）という「逆説」。例外が隠された財宝の神話で、

26 Там же. С. 450.

27 Там же. С. 455-456.

森林住人の中には宝探しの夢にとりつかれる者がいる。

他に分離派 *раскольники* の間には水に関連したユートピア伝説（*Светро озеро, Святое озеро, гора Кутеж*）が伝えられている。

ケルジェネツ川沿岸にはかつて分離派の男女修道院集落が多かったが、レイコフ郷の住民はその影響を受けなかったという説が紹介される。現在は政府の努力でその多くが力を失い、一つか二つが帰一派修道院 *единоверческие монастыри* になっているという。道中、女性修道院を訪問。二人の修道女イリナルヒヤ *Мать Иринархия* とアンナ *Мать Анна* が応対。訪問者は分離派をほめかすもの（数珠など）を探すが（おそらく隠されていて）見つからない。修道女たちはウオッカ、木の実、きゅうり、キノコ、水漬けりんごなどで客をもてなす。（おそらく分離派の兆候を見るため）修道女たちが茶を飲むかを確かめようとするが、うまくいかない。彼女たちが足元にひれ伏す嘆きの儀式を披露する。総じて訪問者は、賢く、ずるく、慎重な修道女たちという印象を受ける。

女子修道院を去るポテーヒンは分離派・古儀式派の信仰の閉鎖性・独善性に関する感想を披露する。彼らは自分の信仰の正当性を固く信じ、勝手に僧院を建てて身分証を持たない放浪者たちに宿を与えているが、そうしたことが市民的秩序の侵犯に当たるということをいくら説得しても効き目はない。また古儀式派にも諸派があり、それらは相互に不寛容で対立している。彼らはまた、古い書物への妄信と新しい書物への敵意を保持している点で時代に逆行している。ポテーヒンは古儀式派を正教会に呼び戻すという意味での単一信仰教会に期待を持っているが、同時にそれが古儀式派のカムフラージュにならぬよう警告を発している。

C 「ヴェトルーガより」

ヴェトルーガはヴォルガの支流であると同時に、ニジェゴロド県マカリエフスク郡およびコストロマ県ヴェトルージュスキー郡一帯を指す地域名でもある。この地域には森の民が住み、森林伐採、輸送船の造船、筏流し、樹脂・タール生産、筵・ござ作りに従事している。ヴェトルーガ川が経済活動の軸で、川からの距離で住民の性格も変わる。すなわち川辺の民は威勢がよく賢く、企業精神があり、小狡い。川から遠い森の民は、人がよくて素朴だが、鈍くて機転が利かない。もっとも栄えている場所がヴォスクレセンスコエ村で、ここにニジェゴロド県ヴェトルーガ地区の資本家・木材業者が集まっている。

ポテーヒンはニジニ・ノヴゴロドからヴォスクレセンスコエを目指すが、道程にセミョーノフ町があり、ここは木さじや大型木皿などの木製品でほとんど独占的なシェアを得ている。そこで木材業が話題となり、とりわけ木材需要と森林保護との関係に論が及ぶ。森林保護のため、木材加工業者は木材を入手するに当たって、国有林の伐採許可状を森林管理局から購入する決まりになっている。市場で彼らの製品を買う仲買人は、生産者から製品と一緒にその許可状も受け取る。そして製品の荷出しの際に、それを森林管理局に提示する。管理局では製品の量を許可状に記載された木材の量と照合し、合致した場合には許可、前者が後者を上回ったばあいには、没収、審査の上罰金などの処分を科す。しかし国有林の伐採権価格が極めて高いため、木材加工業者と保護局の間での汚職や盗伐が発生しやすい構造になっている。ポテーヒンはこうした構造的な害悪を減らすために、国有林伐採権の値下げを提言している。

ヴォスクレセンスコエの近辺では、イギリス人が作った3階建ての紡績工場、およびヴェトルーガ川の波止場にある造船施設のことが語られる。ここで作られるのは、春に樹脂、タール、炭、薪、薄板、その他木製品を積んでヴォルガのサラトフやドゥボフカへと向かう、ベリヤーンという2本マストの単純構造の舟である。

記録の後半部はこの地方の筵もしくはコモ作りと、ござ作りの話で始まる。これらはニジニ・ノヴゴロドの市で売られる品で、製作には織機が必要である。ござ作りの織機で縦糸と横糸の交差速度を二倍に速める工夫を思いついたPという人物のエピソードが紹介される。思いつきを知った筆者がそれを製品化することを勧めると、相手は自分の商売はコモ作りで、ござ作りをする気はないという。新機軸を導入すれば低価格でできて儲かるではないかという、新しいことに手を染める時間がないという。そこで筆者のロシア人論。

ロシアにおける発明の大半がこんな運命をたどるのではないかとよくロシア人は人まねしかできないと言うが、それは嘘だ。それどころか、思うに我々は発明の才にも恵まれている。ただし発明を実践に応用するところまでは修練を積んでいないのだ。しかも我々は生来の怠け者なので、つい従来通りのやり方を選びがちだ。あげくは、自信満々で気位が高いせいで、失敗して笑われるのをまるで子供のように恥じ、恐れるのだ。⁽²⁸⁾

こんな調子で、多くの有意義な発明が、単なる冗談や慰みごとに終わってしまうのだとポテーヒンは述べる。

しかし、それにもかかわらず、ロシア人が単に大きな能力を持っているばかりでなく、機械技術への強い志向を持つことは疑いない。⁽²⁹⁾

こうして作者の知る在野の名匠たちの名があげられる（ヴォルスマの名工ブチーツィン、家一軒を動かす器械や水車小屋を自前で作ってしまうコストロマの百姓、独学で時計作りを覚えた同じコストロマの旧教徒の老人、セミョーノフ町の鑄鉄工場を一人で作ったクジマなど）。

森林伐採も高級な技術のいる職業で、先乗りの調査士が行う樹木選定、徒歩の集団で行う伐採作業、馬に乗って行う運搬作業、河川での運び出しなどに別れる。ポテーヒンはヴォスクレセンスコエから30キロほどの所にある海軍省管轄の広葉樹林をカザン県、シンビルスク県のタタール村の伐採師たちが集団でこの任務に従事する様を記述している。

次の話題はクマ狩り。かつて作者はヴォスクレセンスコエから40キロのチェレミス(マリ)の村に近い森で発見されたクマの狩りに招かれた。よそでは人嫌いだが自分の村では愛想よく開放的なチェレミスの人々の村で、著者は一晩を過ごす。夕べの集いの場で娘たちの歌、グスリの伴奏での踊りを味わいながらウオトカを振る舞う。娘たちの地味な踊り、若者のパンチを欠いた踊りを見ての著者の感想 —

28 Потехин. А.А. С Ветруги, из путевых заметок // Век. 1861. No.4. С. 96.

29 Там же.

概して全体から分かるのは、チェレミス人は活発でもエネルギーでもなく、あまり天与の才には恵まれていないが、善良でおとなしく従順な民であり、ひとことと言えば獵師か農耕者として生きかつ死ぬ定めであり、それ以外のより広範な活動のためには生まれついていないということである。⁽³⁰⁾

翌日一行は大変な苦勞をしながら、巢穴にいたクマを狩ることに成功する。この地の狩獵対象には、他にシカ、ヘラジカ、リス、ライチョウがおり、漁の獲物には小型のチョウザメがいる。漁の仕掛けはヴォルガと同じだが、大型の紅魚はめったにいない。

エッセイの最後には、歸路に投宿したヴェトルーガ沿岸のヴォズドヴィジェンスオエ村の一夜が描かれる。全員ロシア人のこの村では娘たちを交えた夕べの集いがかなり開放的で、客を歌や踊りに招いて酒をねだり、内緒で金をねだるような、「ジプシーの野営場のごとき」雰囲気が出てきている。この「嘆かわしい」雰囲気をかろうじて救うのは、饗宴に交わらない一人の清純そうな娘がいたこと、そして既婚の女性はほとんど混じっていないことだった。

このふしだらな、傍若無人な楽しみぶり、生まれ持ったはずの慎みやたしなみを、たとえ悪気はないとはいえ恥ずかしげもなく振り捨てている様を、美化することはおろか、少しでも正当化したり、あるいは別の言葉で呼んだりすることさえ、私にはできかねる。だが同時に信じてやまないことは、この地のかような風紀の乱れが外来のものであり、商売とともにこの地に入り込んだ、偽物の文明の産物だということである。⁽³¹⁾

⑤ 発見と創作への影響

ポテーヒンの記述した地域は前述のようにある種限定されているが、生業・交通・経済状況を主な着目点として、民衆生活のリアリティに深く切り込んでいる。スレズニョーフはポテーヒンの創作における農村や農民像をこの調査の前後で比較した結果、リアリズムの進化ともいべき現象を認めている。すなわちこれ以前の作品(『ヴォルガの道』『郡都キネシマ』)における農民生活の描写が、凝った装飾的表現に満ちており、具体性を欠いた、善意の旅行者のごとき視点でなされているのに対して、ヴォルガの調査報告を含むこれ以降の作品には、語彙の面でも視点の面でも牧歌詩風のところが消え、風俗や経済生活の積極面と消極面がリアルに描き込まれていると評価している。⁽³²⁾ 確かに彼の調査報告は単に細部描写に富んでいるばかりでなく、漁に関する法の縛りや、国有林の価格設定に関しても、踏み込んだ分析や提言を含んでおり、また民衆の風俗描写においても、現代の交通や経済生活の持ち込む様々な問題をすくい上げている。そうした細やかでかつ批判的な視覚のおかげで、ヴォルガ中流域の住民の、それぞれに大きな差異のある暮らしぶりが、生き生きと伝わってくると言えるだろう。古儀式派の生活描写も、貴重な細部情報を含んでいる。

その反面で、彼のロシア愛・ロシア人論への志向が、気質や信条のレベルにおける人物論

30 Там же. С. 98.

31 Там же. С. 100.

32 Селезнев. В. «Всякой другой рыбы, кроме красной, он гнушается...» [<http://magazines.russ.ru/volga/1998/11-12/selez.html>]

の単純化、タイプ化を促している側面も否定できない。また同じ志向が、他の民族への視線を浅くしている観もある。彼の描くタタールやチェレミスは、全体の中ではエピソード的な位置にとどまるといわざるを得ないだろう。

2.3 アストラハン・カスピ海：アレクセイ・ピーセムスキー（1821-1881）

① ピーセムスキー略歴（1860年代始めまで）

1821年コストロマ県チュフロム郡の領地ラメニエに退役軍人の子として生まれる。モスクワ大学数学科で学んだのちコストロマ県の国有財産管理局に勤務。同8月にモスクワ国有財産管理局に勤務。47年に退職後、50年に再度コストロマ県の官吏になる。同時期にオストロフスキーの誘いで『モスクヴィチャーニン』に接近、40年代から始めていた創作に本格的に取り組む。中編『愚図な男 Тюфяк』（«Москвитянин». 1850. Ч. 5. № 19-20; Ч. 6. № 21）で有名に。自然派的作品と並んで『ペテルブルグの出稼ぎ男 Питерщик』（1852）、『森の主 Леший』（1853）、『大工のアルテリ Плотничья артель』（1855）など、農民生活に取材した短編も手がける。56年にアストラハン、カスピ海を調査旅行。青年カリノーヴィチの恋愛と勤務上の葛藤を描く長編『千の魂 Тысяча душ』（«Отечественные записки». 1858. №1-6）が代表作。1860年から62年半ばまで雑誌『読書文庫 Библиотека для чтения』の編集主幹をつとめ、「ニヒリスト」相手の論争をしたほか、アストラハン地域の調査報告の一部もここに掲載した。アンチ・ニヒリズム小説に『荒れ騒ぐ海 Взбаламученное море』（1863）がある。

② 経緯

ピーセムスキーはポテーヒンと同じく大公が名を挙げた派遣候補だった。当時すでに農民生活のテーマを得意とし、民衆語の知識も持っていたうえに、短編『大工のアルテリ』をクロンシタットに停泊中のフレゲート艦リュウリック号上でコンスタンチン・ニコラエヴィチ大公に朗読した経緯があった。当時御料地局勤務の9等文官だったピーセムスキーの派遣要請に、はじめ当局は難色をしめしたが、2度目の要請で許諾。

③ 調査日程など

公式出張期間は1856年1月9日から11月9日、同年2月後半にはアストラハンに着いている。バクー旅行は同年4月ないし5月初頭。ただしアストラハンで熱病と鬱病にかかった彼は、9月にはモスクワに帰還している。アストラハンとカスピ海旅行の記録は予定通り『海事論集』に掲載されたが、テーマ別のルポルタージュ類のちに『読書文庫』誌に発表された。

ヴォルガ河口からカスピ海沿岸は、複数の民族が住む場であり、中央ロシアから赴いたピーセムスキーの調査報告にも、ヨーロッパとアジアの交わるところを初めて目にする者の、異国情緒が色濃く出ている。記録の内容も、自分の目による観察に加えて、インフォーマントとの対話、専門家のコメントや資料を踏まえた歴史・民族誌的記述などが盛り込まれている。とりわけアルメニア、タタール、カルムイクの3民族論は、ヴォルガ地域論としてだけでなく、独立の民族研究としても読める。

ポテーヒンがヴォルガ住民のロシア性にこだわったのと同程度に、ピーセムスキーはヴォルガ下流の人と自然の異国性・アジア性に興味を示し、各民族論を試みるほかに、文明論的

な思索にもふけっている。⁽³³⁾

④ ピーセムスキーの見たヴォルガ

以下ピーセムスキーの報告書に沿って、彼の見たヴォルガ河口地域の概要をまとめる。ただし本論のテーマであるヴォルガ・イメージに関わる素材に限定する。たとえば彼の第一成果は、クリミア戦争の敗北を受けた、黒海艦隊軍人のアストラハンへの移動に際してのレセプションを記録したエッセイだが、これは時事性に富む記述であるものの、本論のテーマに直接関わらないので省略する。



図5 ステップの道

A 「旅の記録：アストラハン」

1856年1月、サラトフから陸路アストラハンへと旅をしたピーセムスキーは、春のような陽気と見慣れぬアジア的風景に対する印象から記録を始めている。

サラトフを出ると、私はもう掛け値なしの南東地方にいた。太陽はちょうど我々のところの3月末のような照り方をしている。船で行くヴォルガの水面では薄氷がかすかな音を立て、左右には氷に覆われた水と魚釣り用に開けられた穴が、ほとんどむき出しの姿をさらしている。我々の住む上流域の諸県にあるような、規則正しく配置されてびっしりと家が建ち並ぶ村々の代わりに、目に入るの切り立った崖の上に立つ土壁の小さな小屋の群と、周囲の網垣で囲った屋根もない家畜寄せ場だ。見える限りの村の教会の中で石造りのものは一つしかなかった。夕日に照らされたところをみれば、確かに画趣をそそるが、まあ、ただそれきりのことである。⁽³⁴⁾

当地のコサックの複数の起源について、冬期の陸路の困難さについての考察の後、遊牧民の荷馬車、ラクダなどが目に入り、やがてカルムイクの村が見えてくる。

「あれはいったい何という人種だ」私は御者に聞いた。／「カルムイク人ですよ」相手は答える。／「やけに汚らしい連中だなあ」／「きれいなはずがありますかい」御者が言い返す。

33 ピーセムスキーの調査報告類は以下の通り。 *Писемский. А.Ф. Прием черноморцев в Астрахани // Морской сборник. Апрель 1857 г. С. 168-178; Писемский. А.Ф. Путевые очерки (Астрахань) // Морской сборник. Февраль 1857 г. С. 235-256; Писемский. А.Ф. Морская поездки: 1. Бирючья коса 2. Баку 3. Тюк-Караганский полуостров и Тюлень остров. // Морской сборник. 1857 г. Апрель. С. 231-251; Писемский. А.Ф. Астраханские армяне (Из путевых записок) // Библиотека для чтения. 1858. N 10. Отд. 1. 3-я пагинация. С. 1-16; Писемский. А.Ф. Татары // Библиотека для чтения. 1858. N 11. Отд. 1. 6-я пагинация. С. 1-10; Писемский. А.Ф. Калмыки // Библиотека для чтения. 1860. N 1. 4-я пагинация. С. 1-34.*

34 *Писемский. А.Ф. Путевые очерки (Астрахань) // А.Ф. Писемский. Собрание сочинений в пяти томах. Москва, 1982. Том 2. С. 231.*

「ステップの獣同然の暮らしをして、死んだ動物の肉を食らっているんですから。ガキどもな
んか、まるで小鬼みたいに、真っ裸のすすけた姿で駆け回っていまさあ」⁽³⁵⁾

概してピーセムスキーの第一印象を支配しているのはステップ的な風土への違和感であり、いかにも帝國的な以下のような思考である。

「するとこれが」と私は悄然と考えた。「寒いペテルブルグであれほど魅力的に思えた、われ
らが恵まれた南東の地なのか。ステップと馬群と遊牧民の世界たる、広大無辺なヴォルガの
地なのか！」きつと夏にはすべてが活気づくのだろうが、今は貧弱でみすぼらしく、何より
も荒涼としている。この荒野を活性化するためには、たくさんの労働が必要だ。たくさん
の人々を、それも別種の人々を移住させなくてはならない。ステップの民はおそらく自分で改
善する力は持たないだろう。連中に発破をかけてやらねばならない、しかも何をするのか教
えなくてはならない…。⁽³⁶⁾

この後、描写に歴史的な視点が混じり、イワン雷帝のアストラハン・ハン国攻略史とステ
ンカ・ラージン反乱の経緯が復習される。最後にカルムイク人の手櫓で広い川を渡り、左岸
にあるアストラハンの町に到着する。町の近景描写には再度「アジア的混沌」への驚きが混
じる。

小さな木造の粗末な家々は、大半が塙の陰に隠れているが、通りに露出しているのは、窓も
閉ざされて煤だらけの、見栄えの悪い瓦屋根の家ばかり。石造りの建物には、同じように見
栄えの悪いバルコニーというかむしろ回廊が付いているが、皆必ず内庭を向いている。人気
のないステップを他にしてきた私には、とてつもなく人口の多い都市か、それとも市場にや
ってきたような気がした。人間が通りにひしめいているのである。しかもその衣装の多様さ
はどうだ — 毛皮帽子（マラハイ）、ペルシア帽子、ラシャ外套（アルミヤーク）、寛上衣（ハ
ラート）、楯襟服（チューハ）！まるでバベルの塔が建ったみたいに、あちこちからいろんな言
葉の音が飛んでくる。しかもどの言葉にもルツィといった音が入っている気がするのだ…。⁽³⁷⁾

この第一印象記はこの後、粗末な宿でウハー、チョウザメ、キジ肉、メロン、ブドウとい
った豪勢な夜食をとりながら、「アジア的性格」や「バベルの塔」風の豊饒な混沌に圧倒さ
れて終わる。この後ピーセムスキーはカスピ海へ出て、バクーへと旅をするのだが、きわめ
て興味深いその記録は（ヴォルガ世界の外になるので）ここでは省略して、以下は彼がアス
トラハンの非ロシア人住民について行った観察と研究の記録を概観しよう。それらはロシア
帝国のこの地域における民族的な混住状況を、この作家がどのように理解しようとしたかを
語ってくれる。そしてそれは、前の2作家においては比較的希薄だった、多民族ヴォルガの
風貌をあらわにしてくれるものである。

35 Там же. С. 233.

36 Там же. С. 233-234.

37 Там же. С. 246.

B 「アストラハンのアルメニア人」

春から夏のアストラハンの風物として、雪どけ、暑気、塩類土、いなご、洪水、コレラといった話題に触れた後、作者は町の市場や商店の様子を描き、さらに商業をリードしているアルメニア人とその背景に注目する。その記述には、かなりの調査と勉学の跡が見える。

(アストラハンの市場は) かような雑居状態であるが、はっきりと分かるのは、買い物客が兵隊、カルムイク、タタール、ロシアの百姓と雑多なのに対して、売り手の方は大半がアルメニア人だということである。商店街を出たところの大通りでも、事情は同じだ。この通りを歩くと、まるでアルメニアの町を歩いているような気がする。二三人の海軍将校が馬車で通りかかり、ロシア人の役人が急ぎ足で勤めに向かい、ペルシア人が何人か、高い帽子にチョハーを着て手や爪に彩色した格好で、表情豊かな、しかし憔悴したような顔で店先に座っている。だがそのほかは全部アルメニア人なのだ。物売りもアルメニア人、歩いているのもアルメニア人、馬車で行くのも、四つ角で兄弟と立ち話しているのも、みんなアルメニア人である。ひとことで言えば、いくらかのロシア人商人とペルシア人をのぞけば、アストラハンの商業、それも主として比較的安定した、リスクの少ない商売は、すべてアルメニア人の手に握られている。これはもちろん偶然ではなく、アルメニア人の精神や気風そのものに根ざす現象であるが、それにしてもロシア人によって征服されたタタール人の町アストラハンに、いつどうしてアルメニア人が出現したのだろうか。これはむろん誰もが感じる疑問だが、答えはさほどたやすくはない。グメーリンが無邪気に根拠もなく説明しているところによれば、アルメニア人は百年以上前にロシアに移住してきたのだが、当初彼らが居住地として選んだのはカザンであり、アストラハンにやってきたのは、悪疫の後に残った者たちであるという。彼らはアストラハンの気候、ワイン、庭、ロシア当局の対応、とりわけピョートル大帝による招致に満足した結果、同郷人たちを大量にアストラハンへと呼び寄せるようになったというのだ。アルメニア地方の史蹟を調査しているショパンには、そもそもアストラハンのアルメニア人に関する記述は皆無である。カラムジーンによれば、ドミートリー・ドンスコイ大公への復讐心に燃えたママイが、タタール、ポロヴェツ、アルメニア人を自分の軍旗の下に従えた。府主教ボグシによるタヴリア（クリミア）史には、1262年にアルメニアを征服したタタールが、大量の現地住民を今日のカザンとアストラハン県に移住させたとある。リュプーシキンはアストラハンに関する覚え書きに、1619年にアルメニア、ペルシア、インドの商人たちがモズドク（北オセチアの町）とテレク河付近のステップを越えてアストラハンへと至る道を切り開いたこと、彼らが恒常的に定住するようになったのはアレクセイ・ミハイロヴィチ帝の治世であったことを記している。このような短い、断片的な情報から導き出せる結論はただ一つ、すなわちアルメニア人のアストラハンへの移住は急激に起こったのではなくて徐々に生じたのであり、彼らはちょうどユダヤ人がヨーロッパの海辺や交易の中心地に徐々に住み着いていったのと同様なことをアジアにおいて行ったのであって、同じ目的のためにアストラハンにも流入したのだということである。⁽³⁸⁾

38 *Писемский. А.Ф.* Астраханские армяне (Из путевых записок) // Библиотека для чтения. 1858. N 10. Отд. 1. 3-я пагинация. С. 3-4

アルメニア人がアジア版のユダヤ人だというのは、ある種のステレオタイプであろう。さらに絹やらくだの毛を扱うアルメニア人の商才について、ロシア人商人との対抗や、居住条件をめぐる確執について語った後、ピーセムスキーの記述はより民俗学的な文化や風俗の話題へと展開していく。宗教、言語、衣服、習慣、気質の描写である。

アルメニア人は自前の宗教、言語、服装、習慣、ひいてはそのアルメニア人氣質をもって我が国に到来し、住み着いている。宗教の点では、アストラハンのアルメニア人はほぼすべてグレゴリオス派（単性論派）である（カトリックのアルメニア人は100人にも満たない）。アストラハンに彼らは5つの教会を持っている。大聖堂、ウスペニエ（生神女就寝）教会、パトロフ・ポゴスト（聖ペテロ墓地教会）、聖ゲオルギー教会、そして最後に墓地である。³⁹⁾

好奇心満々の作者は教会の聖体礼儀まで見に行くが、その筆致にはこの時代の旅行記一般に散見される、オリエンタリズム風アネクドートとでも言うべき諧謔も混じっている。

そうしているうちにも教会には人が満ちてきた。男が前の方に立ち、女が後ろに立っている。祈る群衆の中でとりわけ私の目を曳いたのは、聖像に近づいてろうそくを立てては引き下がっていく、白衣の女性たちの姿であった。私は女性たちがチャドル（主としてイスラームの婦人用ベール）をかぶっているのだと推測し、きっとベールの下には慎ましい美人が隠れているのだろうと考えた。一人の顔をのぞき込むと、ちょうどチャドルがちょっと開いて、老婆の長い鼻としわだらけの顔が現れた。後に確かめたところによると、アルメニア女性でチャドルをかぶるのは、年寄りときわめて醜い女性ばかりだという。3時間ほども続いた聖体礼儀の間ずっと、厳粛な雰囲気厳しく保たれた。全員が恭しい面持ちで立ち、十字を切った。十字を切る仕方は我々と同じだが、ただし右の肩から左の肩へとという順序ではなく、その反対順であった。聖体礼儀が終わるまで一言として私語を交わす者も、笑みを浮かべる者も、聖堂を出る者もいなかった。⁴⁰⁾

婚礼、葬礼などの儀礼はもう一つの大きな関心の対象である。

司祭が新婚夫婦を祈りで祝福し、花婿の首に細い糸を巻き付けて、端をきつく結ぶ。これは肉の交わりを抑制するしるしである。この後新郎新婦を教会に連れていき、彼らに祈りを捧げ、ぐるりと引き回し、ワインを飲ませ、最後に会食をする。3日の後、司祭が花婿の首の糸を解くと、夫婦は自由となる。私はこのようなことを期待して現代アストラハンのアルメニア人の結婚式に行ってみたが、彼らの縁組みや婚礼のあり方はすっかりロシア風になっており、古来の習慣の内残っているのは新婚者の首に紐を結ぶ儀礼だけだった。この紐にはさらに教会の封印まで施すようになっていた。婚礼の後の晩には、普通新婦のもとに「姉妹」と呼ばれる者たちが集まって、新郎から新婦の身を守る番人の役を務める。これに選ばれるのは通例新婦の肉親か知り合いの未婚女性たちである。三日目の晩、司祭が現れて封印を解き、

39 Там же. С. 5.

40 Там же. С. 6.

新郎新婦が夫婦生活を許されると、ようやくこの娘たちは夫婦の家を去るのである。⁽⁴¹⁾

ピーセムスキーの記述にはさらに衣服、風刺歌、性格（目立ちたがり）、文化的傾向（異文化の表面的模倣、アジア・ロシア混合文化）、娯楽（カード、ダンス、ピクニック、宴会、歌）などが含まれる。最後に、記述はアルメニア人の外見や気質を含んだ総合的ステロタイプのごときものに結実するが、それはかなりネガティブな評価を含んでいる。

誰もが知るとおり、アルメニア人はほぼ全員ブルネットで、顔立ちはかなり整っており、顎ひげも口ひげも剃り、大半が美しい黒い目をして、ほとんど皆賢そうな、秘めた情熱をたたえた表情をしている。しかしほとんどどの一つの顔にも、諸君が好んで人間の顔に見るところを望むような、魂の明るい側面、もしそう言ってよければ、道徳における紳士らしさ、すなわち高尚で繊細なる知性、人を引きつける善良さ、表情に富む顔つきに浮かぶ夢想といったものをほめかすものはない。アルメニア男性あるいは女性の潤いを欠いた黒い目には、文字通りドライな、卑近な現実精神が漂っている。彼らの目は、あたかもこう語っているかのようだ — 私たちは金勘定もできるし、カルタ博打もできるし、商売の経営も、実務書類の作成もできる。私たちの体内には肉の欲望がうごめき、私たちはこの地上を愛している。しかし天上や星々、高尚な思念、夢、感情は私たちのものではないし、私たちには無縁なものだ。どのアルメニア人においても、この実際的な精神が残余の精神的能力を凌駕している結果として、次のような事実が存在する。すなわちアルメニア人の中には放蕩者も、浪費家も、乞食もいない。決して額に汗するような勤勉家ではないが、ただ律儀で退屈なドイツ人を10人集めたくらい、計算高いのである。⁽⁴²⁾

C 「タタール」

アストラハン・タタールの由来に関しても、ピーセムスキーはグメーリン、カラムジーンといった歴史家の見解を比較して検討している。ただしアルメニア人に関してはその渡来の経緯に関心を寄せていたのに比べ、タタールについては、その（ロシア人の到来以前からの）原住性ないし先住性が問題となる。

いずれにせよタタールはアストラハン県の原住民である。彼らはこの土地を所有し、この土地とともに征服され、そして今でもこの土地の住民の重要な一部をなしている。私自身目下タタールの村に暮らし、貧相な作りのタタール横町を徘徊し、運河を渡るにもいわゆるタタール橋を通る。見た感じでは、この地のタタールはコストロマ、カザン、ペンザのタタールとよく似ているが、ただしアストラハン・タタールはより大柄のようだ。ブーツかオーバーシューズのような短靴を履き、長い麻のルバシカの上に刺し縫いを施したアハルク（短いカフタン）やハラート（長い上着）を羽織り、剃った頭にエルモルカ（円帽）を付けて、その上から毛皮の縁が付いた帽子をかぶって、小さくて貧弱な自分の店のあたりに座り込んでいる姿は、どこかの巨人族のように見える。彼らを見てみると、つついギーゴリのサバケー

41 Там же. С. 7-8.

42 Там же. С. 15.

ヴィチの姿が思い起こされ、きっとこれらの者たちをこしらえる際にも、自然は細かな道具など用いることはせず、ただ自らの肩から切り取ったのだらうと思ってしまう。一度つまむと鼻ができ、もう一度つまむと口ができ、錐でほじると目ができといった調子で、仕上げの加工も何もなく、そのまま神の世界に解き放って、生きよと命ずるというわけだ。通りではよく、ムスリムの習わしに逆らって、頭にハラートをかぶったタタール女性を見かける。チャドルの代わりにつもりなのだが、全然きちんとかぶってはいないので、女性たちの面広の、顎の張った顔や、小さいがたいそうきれいな目や、あげくはベシュメート（部屋着状の上着）、細いズボン、モロッコ革の靴下、突っかけ靴といったものまでも、大変よく観察できるのだ。⁽⁴³⁾

アルメニア人に比べてタタールはヨーロッパ・ロシアにおいてもかなりなじみの深い存在だけに、作者の関心の「オリエンタリズム度」は低いが、その分だけ「自然な」差別や偏見が表面化しているように見える。作者はタタール人アブベケールをインフォーマントにして、彼らの生業である畜産、農業、織物、水運、荷役などを調査しているが、このインフォーマント自身、タタールに同情的ではないようだ。

「タタールの連中は教育がなくてケチです。経験のある水先案内を雇わないで、身内でやれば安上がりだと考える。地図というものも知らないから、神さまの思召しに任せて、記憶で船を進めるわけです。荷がニジニからくるのは秋口で、水の少ない時期です。海風が吹いている内はまだいいが、それがやむと、よっぽど注意していないと浅瀬に乗り上げてしまう。今どき蒸気船に引っ張ってもらえばまた金がかかるから、そこで冬越しになる。ところが春になるまでには、氷で船に穴が開くというわけですわ」⁽⁴⁴⁾

タタールをめぐる作者の考察は次第に文明論的な様相を帯び、アジアとヨーロッパの対抗というパラダイムが生じる。

以上の小景から読者もおわかりだろう。かつては戦士としてカスピ海近辺を支配し、後には商人や工場主を勤めたタタールが、今ではアストラハンの全住民の中で、カルムイクに次いでもっとも貧しい、最下級労働者の階層をなしているのだ。彼らの生活を改善してやりたいという博愛的願望がいかに強くとも、それは不可能だろう。非はアジア人の本性にあるからだ。おそらくアストラハンほどアジアとヨーロッパの両世界が間近に接している場所はない。そしてここほどはっきりと明瞭に理解できる場所はない — これまで北が東に打ち勝ってきて、そしてやがて完全に飲み込もうとしている、その理由を。知的には怠惰、宗教上は運命論者、いかなる改善能力も競争心もなく、実践的な意欲にも欠けた当地のタタール人は、いわば精神においてザリガニであり、後ずさることしかできないのだ。彼らの願いはひたすら父親が、曾祖父が暮らしていた通りに暮らすことに他ならず、それがかなわないと一切れの

43 Писемский. А.Ф. Татары // Библиотека для чтения. 1858. N 11. Отд. 1. 6-я пагинация. С. 2.

44 Там же. С. 4.

パンのことで殴りあうしまつなのだ。⁽⁴⁵⁾

ピーセムスキーの記述はさらに結婚の風習（多妻制、仲人、身請け金）、ベラムとラムダンなどに及んでいる。

D 「カルムイク」

カルムイクを語るに際して、ピーセムスキーはまず、自分がかつてサラトフより南のロシア、特にステップ地帯に関して持っていた、ロマンチックな「野性的南方」のイメージを告白している。

青年期の私は、地図を見ながら、サラトフこそが我々にとっての日常的な、人間的な世界の境界だと思っていた。そこにはありふれた田舎町と、小さな寒村があり、退屈な街道が走っている。そしてその先は、何も無い自由な空間が広がり、そのただ中で野蛮で戦闘的な種族が遊牧生活を営んでいる — そんな風に思えたのだ。彼らの畜群が膝の丈まで茂った豊かな牧草地をゆっくり歩いている。勇猛で走ることに駆けては引けをとらない騎手である彼らも、悍馬の背に乗って、自分たちのユルタのそばを歩んでいる。ユルタの中には、フェルトの覆いのかげに、色黒で漆黒の目をした妻たちや、巻き毛の子供たちの姿が見える。何人かの老人たちが、深い草むらに腰を下ろし、暖かな馥郁とした大気を吸いながら、冷えた馬乳酒を飲んでいる。茂った芦原をイノシシが揺らし、そうかと思うと遠くの方を、狩人たちに追われる野山羊の群れが走りすぎていく。⁽⁴⁶⁾

しかし現実のヴォルガ下流は、こうしたロマンチックな夢を破る、貧相でかつ不毛な世界だった。

今もう私は何日かこのステップ地方にいるが、なんと言うべきか、かつての私の想像のうち百万分の一でも現実に見合っていたらどうか？カスピ海に始まって先へと広がっている肥沃なステップと思っただけのものは、じつは塩地の丘で、ところによっては全く草も木も生えていない。仮に何か生えている場所があったとしても、いっそ見ない方がまだ。しおれて乾いて赤茶けた植物ばかりで、ことわざにあるように、べんべん草がべんべん草に呼びかけているような、荒涼たる景色なのだ……。豊かな水があふれていると思っただけのも、ヴォルガとクマ河を別にすれば、流れているのは、サルバ、エゴルイシ、マヌイシその他の貧弱な小川ばかりで、水もしょっぱくて苦く、呑むのは不可能だ。ヴォルガとクマの沿岸およびサラトフ県の境界あたり、およびドン軍団の土地にいくと、この死んだような光景が幾分活気づくが、それといえどもどこか北ロシアあたりの川沿いの草場には決して勝るものではない。馥郁たる空気というのも、一年の内に列氏で上下40度も幅があるので、決して健康によいとは言えない。木立については語るべきこともない。生えているのは薪にさえならないサル柳や白柳ばかりで、それも何十露里も走ってやっと何本かの樹木が目につく程度のものである。イ

45 Там же. С. 5.

46 Писемский. А. Ф. Калмыки // Библиотека для чтения. 1860. N 1. 4-я пагинация. С. 1.



図6 塩湖



図7 現代エリスタの仏教寺院
(カルムィキア)

ノシシもサイガ（レイヨウ）の群れも私は見たことがないが、話によるといるそうで、おまけにアナグマ、ジャッカル、キツネもおり、大量のウサギもいるらしい。鳥類は、ステップの鳥も水鳥も豊富で、雉、野雁、クラハリ鴨、白鳥、野鴨、どこにでもいる鶺鴒、ペリカン、大カモメ、カモメ、サギがいる。⁽⁴⁷⁾

カルムィク人はいわばこのように殺伐としたアジアのロシアのシンボルのように登場する。

しかしこうした貧しい自然環境の中にも、(もしも遊牧生活を人間の生活と呼べるならば)一民族全体が暮らし、遊牧をしている。彼らは自己流の生き方にしっかりと結びつけられていて、他の生活をろくに知らないし、望みもしない。その民族とはカルムィクである。もとはモンゴル人で、4つの氏族からなり、もとも種族から離れたためにエレート、すなわちタタール語のカルマク（離脱者）と呼ばれた。そもそも彼らは四種族に別れる。ホショウト（勇敢なもの）という種族はチベット近辺にとどまった。ジュンガル（左翼）はジュンガル・ステップを放牧地とした。デルバト（右翼）は初め遊牧してウラルに至り、後にウラルを越えてドン河にまで至った。そして最後にトルゴウト（巨人）は、ホショウトやジュンガル・カルムィクと敵対したため、指導者ハルリュクに率いられて五万のユルタ集団となってヴォルガの岸へとやってきたのである。⁽⁴⁸⁾

こうした文章には相変わらず対象への距離が感じられるが、ただしこの項の冒頭に取り上げた『旅の記録：アストラハン』でのカルムィクの外面的描写（「やけに汚らしい連中だなあ」）に比べると、視線も関心もかなり深まっているのが感じられる。主として経済的な劣者であることに基づく否定しがたい差別意識は別にして、作者はヴォルガ・カルムィクの由来、ロシアへの臣従と離脱（17-18世紀）の経緯を語り、現在のカルムィクの社会構造（親族・部族構成、民族の指導者、聖職者、カーストなど）を、ある種学問的な詳細さで論じようとしている。続いてラマ教とその世界観について、造物主、被造物、人間、世界の諸力、

47 Там же. С. 1-2.

48 Там же. С. 2.

物と肉体と精神、ダライ・ラマ、カースト、罪、死（別の生）、宗教指導者 бакши、ニルヴァーナなどの概念をめぐって解説しているが、それらはカルムイク研究の先達チェルカーソフの書物の草稿⁴⁹⁾ から学んだものである。さらには、日課、祭日、儀礼（生誕、結婚、葬儀）、家の構造、食、生業、競馬、相撲、猟、医療などの記述が続く。結果的にピーセムスキーはアストラハンの非ロシア民族の内カルムイクに破格に長い記述を捧げているが、⁵⁰⁾ それはそのまま対象のエキゾチシズム（ロシア人の文化感覚からの距離）の度合いを示し、ひいては著者の民俗学・社会学的な好奇心・関心の度合いを示していると言っていだろう。

⑤ 発見と創作への影響

ピーセムスキーの描く南部ロシアは、茫漠たるヴォルガの河口、カスピ海、大都市アストラハンとアゼルバイジャン、そこに住む非ロシア諸民族によって代表される。結局ヴォルガ下流域とは、ロシアの行政府と軍の支配の下に複数の民族が境を接し、混じり合って暮らすという、ロシア帝国の縮図のような場所であった。彼の記述の根底には「定住対遊牧」、「キリスト教対異教」「ヨーロッパとアジア」という文明論的対立項が明確に存在し、前者の優越が自明視されている。それを踏まえた上で、ここに描かれる南方の民族や宗教には、以下のような序列付けが感じられる。

エキゾチシズム度＝文の長さ

カルムイク＞アルメニア＞タタール＞コサック

文化度設定＝経済レベル

コサック（？）＞アルメニア＞タタール＞カルムイク

いっぽう、ペルシア（イラン）人、テュルク系民族、カフカス諸民族、ユダヤ人は、登場度が低い不確定要素である。

こうした構造は紋切り型の域を出ないが、実体験と文献やインフォーマントからの情報を組み合わせた彼の報告の文章自体は、決して単純でも無味乾燥でもない。アジア的ロシアに対するヨーロッパ・ロシア人らしい驚きや好奇心が臨場感を生み、一方でこの地を「文明化」する方法を考えながら、他方でそれぞれの民族の歴史を渉猟するような関心と想像力の多極性が、テキストの深みを作っている。結局、作者自身についても多くのことを語る興味深いテキストになっているのだ。

この1年の経験は、おそらくピーセムスキーのロシア観に大きな影響を与えたであろう。この後の小説作品に特に南方を題材にしたものはないが、ちょうど同じ時期に作家ドストエフスキーがシベリアで自覚したような「本物のロシアを見てきた」者の自信のごときものは、60年代の彼の反二ヒリズム評論にもうかがえるのである。

49 *И. Черкасов. Историческое и хозяйственное описание Архангельской губернии (1859) : Краткий очерк административного устройства астраханских кармыков (1860)* .

50 『読書文庫』の版でアルメニア人、タタール、カルムイクの記述はそれぞれ16, 10, 34ページ。

結語

以上3名の作家によるヴォルガ調査旅行は、それぞれ特徴的な地域像の描出につながった。オストロフスキーの描くトヴェーリを中心とした上流域は、かつてはロシア政治・軍事史の主要な現場であり、この調査の時代には主として運輸と交通の経路であった。オストロフスキーはその場所を、好適な立地が地場産業の発達を妨げ、鉄道が街道町を滅ぼすように、両義的な力が働く近代化途上のロシアの縮図としてとらえている。ポテーヒンの描く中流域のサラトフや支流の森林地帯は、漁業や林業などの伝統的生業が伝統的な手法のまま残っている場で、森の奥には文化を異にする古儀式派やタタル、チェレミスの集落も見えるような、奥行きのある空間だった。もちろんポテーヒンの記述は、溺れかけたところを救われて大量の札束を乾かす地場の資本家のあさましい姿や、伝統漁法を脅かす大規模水産業や水堰など、この空間に働く新しい力をも見逃していない。一方、ピーセムスキーの描くアストラハンは、ここに登場した中でもっとも大きく平坦な都市で、欧亜にまたがる複数の民族が経済的・文化的格差構造の内に共存しているという、ロシア帝国のモデルのような空間だった。ピーセムスキーはステップの海に浮かぶ舟のようなその遠景と、見通しのきかぬ迷路のような近景を、見事に描き分けている。3つの絵はヴォルガの3態を示すと同時に、19世紀ロシア帝国の3側面をも示していた。そしていずれの調査も、作家自身のロシア観やロシア人観に影響を与えるような、大きな経験となったように思える。

ここに見た一連の調査とその成果について、総合的な評価をすることは難しい。ただし、我々の立場から、限定的な性格付けを試みることは可能である。一つの論点は、この調査が大公ないし海軍省の企図にどの程度応えたかであり、もう一つは、ヴォルガ文化圏の認識やイメージ形成という点で、こうした活動にどんな意味・特徴があるかということである。

前者についていえば、まず海軍省が受け取った情報の量の問題がある。それは決して多くはない。すなわち、オストロフスキーの場合は本論で取り上げた「トヴェーリ」はじめ4編の旅行記、ポテーヒンは「サラトフ県の紅魚漁」1編のみ、ピーセムスキーは「黒海艦隊軍人のアストラハンでのレセプション」「アストラハン」「ビリューチヤ・コサ（オオカミの瀬）」「バクー」「チュク＝カラガン半島と海豹島」の5編である。⁵¹⁾ そのほかの情報は、本論で参照した成果も含めて、別の媒体に発表されるか、もしくはそのままお蔵入りとなった。『海事論集』自体の編集ガードの堅さや印税の低さによる自業自得の面があるとはいえ、3名の作家を1年派遣した成果としては、控えめなものだったかも知れない。

次の問題は情報の質と分布である。地域社会の記述という意味では、いずれの作家のレポートも豊かな情報を含んでいる。とりわけ生業、経済状況、風俗・気質、信仰生活、地域史などの領域について、それぞれの作家が実見、聞き取り、資料参照などの手法を交えて行った調査記述は、きわめて生彩に富んでいる。ただし、調査の出発点にあった水辺の住民を海軍のリクルート対象として検討するという目的を想起すると、この調査の貢献は多少割り引かざるを得ない。そうした目的に間接的にせよ役立つ情報は、トヴェーリの船員たちに関する記述（「春の船団」）、サラトフの漁師や潜水夫の記述（「サラトフ県の紅魚漁」）など、限られているからである。総じて『海事論集』には、ヴォルガを含む各地の水運や漁業につい

51) 3名の文章による貢献は『海事論集』の版で総計116ページ分にあたる。

ての一般的な記事がしばしば掲載されていた。そのことを考慮に入れると、上記のような関連記事の情報としての稀少さも自明ではないし、そもそも作家たちが海軍省の軍事的含意を理解していたかどうかさえ疑わしい。

もう一つの問題は情報の地域的偏りである。ここに盛られた情報は、おおむね源流からトヴェーリまで、中流のサラトフ県、支流のケルジェネツやヴェトルーガ（発表は別媒体）、および河口のア



図8 コストロマの船着き場

ストラハンとカスピ海に関するものに限定される。上流域のリュビンスク、ヤロスラヴリ、コストロマ、中・下流域のニジニ・ノヴゴロド、カザン、サマーラ、シンビルスク、ツァリーツィンなどの都市とその周辺については、ここから得られる知識はない。仮に大公や海軍省が、ヴォルガをヨーロッパ・ロシアの北西部から南東部へとカギ型を描いて横たわる一筋の帯と考えていたのだとしたら、作家たちはその両端と中間の3断片をクロスアップしてみせたということになる。彼らの記事が発表された順序も時期もばらばらだったことを考慮に入れれば、これを一つの河を巡る集団的調査記録だと受け止める読者の意識も希薄だったかも知れない。ただ我々がここで試みたように、数年かけていくつかの媒体に発表された記述を集めてみたとき、はじめて彼らの調査の狙いや相互関係（および限界）が見えてくるのである。

以上のような意味で、仮に企画者の意図がヴォルガ地域の住民の総合的な調査だったとするなら、作家たちの作業はそれに直接応えるものではなかった。1933年にマクシム・ゴーリキーを代表とする120人の作家が行った白海＝バルト海運河建設現場集団視察などと比較するなら、国家権力と作家たちはいまだ健全な住み分けをしていたと言えるだろう。ただ、そのような実用的見地から見た結果論としての情報の価値は別にして、ここにはヴォルガ・イメージのありかたという点で、興味深い要素が露呈している。

まず作家たちが自分たちの調査をヴォルガ全域の理解に関わる共同作業と見なしていたか、それとも個別地域研究と考えていたかという問題がある。これについて、彼らがヴォルガを分断された点の集合としてではなく、あくまでも一連の空間としてイメージしていたことは、いろいろな要素から推測できる。オストロフスキーは自分の使命をはっきりとヴォルガ調査の内の水源からニジニ・ノヴゴロドまで部分と認識しており、調査報告にもその通りのタイトルをつけている。

とりわけ水源への強い関心は、あえて馬車でバルダイ丘陵の悪路を踏破するような冒険を彼に強いているが、それはこの長大な川の全体をイメージする想像力があって初めて意味を持つだろう。「倒れてすでに朽ちた白樺の木の下から、ヴォルガがほとんど目に見えぬほどのちっぼけな川として流れ出している」⁽⁵²⁾ という日記の記述も、川の全貌を思う意識にてらした時、感動的に響く。怪我のためトヴェーリより下流は同年に調査ができず、報告は中

52 *Островский. Н.А. ПСС в 12 тт. Т. 10. С. 370.*

途中で終わったが、彼は翌年にニジニ・ノ
ヴゴロドまでの調査を継続している。す
なわちこの地までを一つながりと考え、
さらにそれがヴォルガという巨大な存
在の頭部であるという意識を持ってい
たのである。ポテーヒンについてい
えば、はじめ彼は最下流の部分を除く
ヴォルガ全域の調査を引き受け、後
に『モスクヴィチャーニン』の先輩
オストロフスキーの意をくんで、
上流域を譲った。いわば最初から
ヴォルガを全域としてとら



図9 汽船からの風景

えていた。いまだ川幅がさほど広くなく、町が河を挟んで両岸に展開する上流域コストロマ生まれの彼には、対岸が見えぬほどに広がった中・下流域の調査は、自然と文化の連続性と変化をたどる意味で、きわめて興味深い認識の冒険でもあっただろう。気候などの条件で1年以内での任務終了が危ぶまれたときには、「予定の期間で5県にわたるヴォルガ沿岸部を調査する見込みが立たないため」出張の2-3ヶ月延長を申請して断られている。⁽⁵³⁾ 彼にとってもヴォルガは点の集合ではなく、連続性において意味を持つ空間だったと思える。ピーセムスキーの姿勢は3人の中では特殊だが、それは担当の地域と関連がある。そもそもポテーヒンと同じコストロマに生まれ、官吏をしていた彼にとって、サラトフより下流の地域は、文化の果てであり、異界だった。気候・風景を語るにも、アストラハンのタタールを論じるにも、彼のうちには潜在的に森林のロシアとステップのロシアの対比のパラダイムがある。いわば広がった果てに海に流れ込んでいくヴォルガの尾を見る目の中に、その頭部を見て育った者の感覚がインプットされていた。両者の差異が大きければ大きいほど、その連続性や一体性の意味も大きかったのである。いわば3作家はそれぞれ、自分の受け持ち空間を扱いつつながら、ヴォルガ全域を意識していた。

問題は、調査者たちの実際の動きが彼らの企図からずれて、それぞれが受け持ち部分の小さな断片しかカバーできなかったことである。その理由にはオストロフスキーの怪我、ピーセムスキーの病気など、不測の要素も含まれるが、また地理条件や天候などによる移動の困難さという、いわば予備学習可能な部分も大きかったように思われる。たとえばポテーヒンは冬期の森林地帯調査と初夏のサラトフ水域調査を組み合わせているが、この調子で中・下流域5県を1年で巡るのは、かなりな強行軍というべきであろう。当初の想定通りに上流域までを一人で担当していたとしたら、そもそも成り立たない企画だったかも知れない。彼の調査の遅れとは、多分に企画の甘さの結果だったのではないか。他の二人の怪我や病気にも、悪路と風土病という、予測不能とは言い切れぬ「自然」条件が絡んでいる。端的に言えば、作家たちにはヴォルガの大きさや多様性に関するイメージはあっても、個々の具体的な状況に関する知識も備えもなかったように思える。

おもしろいのは、ピーセムスキーのカスピ海航行を除いて、彼らが終始陸路にこだわり続けたことである。海軍省の派遣条件の交通費関連に駅馬券の支給のみが盛り込まれていたと

53 *Максиаов С.В. Литературная экспедиция. С. 35.*

ころから見ると、そもそもの企画に水路は想定されていなかったのかも知れない。もちろん冬期に調査に入ったポテーヒンやピーセムスキー、雪解けの増水期に活動し始めたオストロフスキーが、まず陸路で動くのは必然だが、すでに1840年代に就航していたヴォルガ定期航路などを併用して、夏期に効率的な調査を企画することも可能だったはずである。実際、そうした手法で行われたヴォルガ全域のパノラマ的な記録は、同じ19世紀に存在している。たとえば、早くも1830年代に行われたチェルネツォフ兄弟による水上スケッチ旅行の記録、ネミローヴィチ＝ダンチェンコによるヴォルガ就航記（1877年刊）、ワシーリー・ローザノフのヴォルガ航海記『ロシアのナイル』（1907年刊）などがそれに当たる（文末年表参照）。

おそらく本論で見たヴォルガ調査記録の特徴とは、作家たちがそのようなマクロなパノラマを志向しなかったことにある。つまりそれは、各人が岩だらけの山道や真っ暗な林道、雪解けの悪路をたどりながら、地上を行く人の目線と時間で切り取った空間情報である。文人たちは結果として、自分の足でヴォルガ＝ロシアの巨大さと多様さを確かめたのである。

参考資料

- Волга, историческая этнография. Энциклопедический словарь Ф.А. Брокгауза и И.А. Ефрона.
Лакишин.В. Александр Николаевич Островский. Москва: Искусство, 1982.
- Люсий.А.* Фактор Волги: Волжский текст в структуре текстологической концепции русской культуры.
Неопубликованная статья.
- Максимов.С.В.* Литературная экспедиция (По архивным документам и личным воспоминаниям) //
Русская мысль. 1890. No. 2. Стр. 17-50.
- 望月哲男 「19世紀ロシア文学のヴォルガ表象：アポロン・グリゴリーエフ『ヴォルガをさかのぼって』
を中心に」『境界研究』No.2 (2011), pp.65-83.
- Немирович-Данченко.В.И.* По Волге (Очерки и впечатления летней поездки) . СПб.: Изд. Книгопродавца
И.Л. Тузова, 1877. Переизд. М.: Гос. публ. ист. б-ка России, 2008.
- Перетяткович.Г.* Поволжье в XV и XVI вв. М., 1877.
- Его же.* Поволжье в XVII и начале XVIII в. Одесса, 1882.
- Пыпин.А.* Волга и Киев // Вестник Европы. 1885. № 7.
- Розанов.В.* Волга от Оки до Камы. СПб., 1889-1890.
- Розанов.В.* Русский Нил // Русское слово (26, 30 июня, 17, 18, 24, 27 июля, 5, 24, 31 августа 1907 г.)
[http://www.history.vuzlib.net/book_o032_page_2.html]
- Селезнев.В.* «Всякой другой рыбы, кроме красной, он гнушается...» (Алексей Потехин в Саратовской
губернии) // Волга. 1998. No. 11-12.
[<http://magazines.russ.ru/volga/1998/11-12/selez.html>]
- Фирсов Н.* Инородческое население прежнего Казанского царства в новой России до 1762 года. Казань,
1869.
- Чернецовы.Г. и Н.* Путешествие по Волге. М.: Мысль, 1970.

図版出典

- 図1 伊藤薫作成
- 図2 2010年9月20日、筆者撮影
- 図3 2010年9月20日、筆者撮影
- 図4 2011年8月9日、桜間瑛撮影
- 図5 2011年8月12日、筆者撮影
- 図6 2011年8月13日、後藤正憲撮影
- 図7 2011年8月12日、筆者撮影
- 図8 2011年9月16日、筆者撮影
- 図9 2011年8月10日、桜間瑛撮影

年 表

Волга и русская литература нового времени

год	литература и культура	события
1747	<i>М. Ломоносов.</i> Ода на день восшествия на всероссийский престол ее величества государыни императрицы Елисаветы Петровны 1747 года.	
1760	<i>А. Сумароков.</i> Долины, Волга, потопля...	
1767		Путешествие Екатерины II по Волге
1776	<i>М. Муравьев.</i> С берегов величественной Волги.	
1793	<i>Н. Карамзин.</i> Ода "Волга".	
1794	<i>И. Дмитриев.</i> К Волге.	
1810	<i>Ф. Глинка.</i> Мечтания на берегах Волги.	
1816	<i>К. Батюшков.</i> У Волги-реченьки сидел...	
	<i>П. Вяземский.</i> Вечер на Волге.	
1826	<i>А. Пушкин.</i> Песни о Стеньке Разине.	Ссылка декабристов в Сибирь
1831	<i>М. Лермонтов.</i> Атаман.	
1833	<i>А. Пушкин.</i> История Пугачева.	Путешествие Пушкина на Волгу и Урал
1836	<i>А. Пушкин.</i> Капитанская дочка.	Прмиера оперы Глинки "Иван Сусанин"
1837		Путешествие царевича Александра по России
1838	<i>А. Кольцов.</i> Стенька Разин.	Путешествие братьев Чернецовых по Волге
1841		Переселение молодого Толстого в Казань
1843		Общество пароходства по Волге
1845		Основание Русского Географического общества
1846		Регулярная пароходная навигация по Волге
1847	<i>Ф. Достоевский.</i> Хозяйка.	
1849	<i>И. Гончаров.</i> Обломов.	Ссылка Достоевского в Сибирь
		В.И. Даль стал председателем Каз. Пал. Нижегорода
1851	<i>Братья Чернецовы.</i> «Панорама берегов Волги».	Петербург-Московская железная дорога
1856	<i>С. Аксаков.</i> Семейная хроника.	Литературная экспедиция по Волге
1857	<i>А. Потехин.</i> Лов красной рыбы в Саратовской губернии.	
	<i>А. Писемский.</i> Путевые очерки (Астрахань).	

1858	<i>Н. И. Костомаров.</i> Бунт Стеньки Разина.	
	<i>Н. Огарев.</i> Сторона моя родимая.	
1859	<i>Н. Островский.</i> Гроза.	
	<i>Н. Островский.</i> Путешествие по Волге от истоков до нижнего-Новгорода.	
1860	<i>Н. Некрасов.</i> На Волге.	
1862	<i>А. Григорьев.</i> Вверх по Волге.	Московско-Нижегородская железная дорога
1865	<i>Н. Островский.</i> Воевода.	
	<i>Н. Лесков.</i> Леди Макбет Мценского уезда.	
1866		Покушение на Александра II и награждение Комиссарова-Костромского
1867	<i>Н. Островский.</i> Дмитрий Самозванец и Василий Шуйский.	
1869	<i>И. Гончаров.</i> Обрыв.	
1870	<i>А. Навроцкий.</i> Утес Стеньки Разина	
1873	<i>И. Репин.</i> Бурлаки на Волге.	
1874	<i>П. Мельников-Печерский.</i> В лесах.	
1877	<i>В. Немирович-Данченко.</i> По Волге (Очерки и впечатления летней поездки)	
1881	<i>П. Мельников-Печерский.</i> На горах.	
1883	<i>Д. Садовников.</i> Из-за острова на стержень	
1884	<i>Д. Садовников.</i> Сказки и предания Самарского края	
1885	<i>А. Пытин.</i> Волга и Киев.	George Kennan's Siberian expedition
	<i>В. Гиляровский.</i> Бурлаки.	
1888	<i>И. Левитан.</i> Вечер на Волге.	
1889	<i>И. Левитан.</i> Вечер. Золотой Плес.	
	<i>С. Степняк-Кравчинский.</i> Домик на Волге.	
1890	<i>В. Рагозин.</i> Волга от Оки до Камы.	Путешествие А. Чехова на Сахалин
1891		Начало строительства Сибирской железной дороги
1895	<i>И. Левитан.</i> Свежий ветер. Волга.	
1896	<i>М. Горький.</i> Самара во всех отношениях.	
1907	<i>В. Розанов.</i> Русский Нил.	
1909	<i>М. Горький.</i> Город Окуров.	
1914	<i>М. Горький.</i> Детство.	